●文部科学省●
経済社会の発展を牽引する
グローバル人材育成支援事業採択

行動力ある
アジアグローバル人材の育成

事業報告書

［平成26年度］

亜細亜大学
亜細亜大学短期大学部

亜細亜大学・亜細亜大学短期大学部　学長　池島　政広

平成 24 年後期に始まった、本学の「行動力あるアジアグローバル人材」育成の取り組みも早くも３年目が終わろうとしております。

「充実期」にあたる今年度は、これまでに立ち上がったプロジェクトを質・量ともに発展させる意気込みで進めてまいりました。

特に、中国、韓国、シンガポール、マレーシア、ベトナム、フィリピンでの体験型海外学習として位置づけている「多文化インターンシップ」「多文化フィールドスタディー」では、多く学生が参加し、教室では学べない、しかもよりタフな環境で成長したことと自負しております。

各留学プログラムでは、IT ツールを活用した学生指導方法の確立を目指しました。例えば、留学前・留学中・帰国後の一連つながりの中で学生の成長を測定するツール「グローバル・ビジネスリテラシーアセスメントシステム」をウェブ上で利用できるようにしたと同時に、特定グループの学生らには iPad を貸与し、留学中のどんな場面でも自己評価の裏付けとなる行動記録を入力できるようにしたこと、さらに TOEIC®のスコア全記録をオンラインポートフォリオに登録し、教員とともに進捗を確認できるようにしました。

また、大学卒業後の進路を見据えたキャリア指導も強化し、外部から専門家を招き、主に３年次生の意識改革を行ったが、結果として学生だけではなく指導に関わる教職員にも良い刺激となり、いわば FD、SD としての研修効果も生まれました。

この秋、全ての採択大学で「中間評価」が実施されました。その結果は、本学にとって多くの課題が残るものとなり、特に英語力の向上、カリキュラムの国際化、外国人留学生数の確保など、どれも重要な項目ばかりであります。

これまで採択された国際関係学部を中心に事業を進める傾向にありましたが、いまこそ全学をあげて課題を克服していくとともに、より高いレベルの成果をあげるべく尽力してまいります。

●目次●

平成 26 年度　活動報告(時系列) 1
推進本部会活動実績 5
ワーキンググループ活動実績 6
多文化インターンシップ　7
多文化フィールドスタディー　8
多文化マーケット　9
学習・活動記録ファイル　9
学習成果記録帳　10
英語および TOEIC®　11
地域言語・チューター実績ならびに検定料補助 12
キャリア支援　13
海外研修に伴う危機管理対策　13
学習支援環境整備　14
グローバル・ポートフォリオシステム（manaba global）活用による指導充実化　15
グローバル・ビジネスリテラシーアセスメントシステム　PDCFA インストラクター　16
留学促進ツール・国際交流ラウンジの活用　16
英・中・韓公式サイトからの情報発信　17
事務職員研修　18
≪海外出張報告≫
多文化インターンシップ
　マレーシア(8 月)　21
　マレーシア(9 月)　21
　シンガポール(8 月)　22
　中国(8 月)　23
　韓国(9 月)　25
　インド・シンガポール(9 月)　26
　マレーシア・シンガポール(3 月)　27
　韓国(3 月)　28
　香港・上海(3 月)　29
多文化フィールドスタディー
　ベトナム(8 月)　30
　韓国(8 月)　31
　フィリピン(9 月)　32
アジア夢カレッジーキャリア開発中国プログラムー
　現地受入関連　35
　オリエンテーション及びキャリア指導など 36
　キャリア研修等　37
　調査指導など　38
　インターンシップ
受入企業との協議　39
　修了式、企業訪問等　40
AUEP　交換・派遣留学制度
　韓国(5 月)
NAFSA 年次大会出展
　サンディエゴ(5 月)
APPAIE
　中国(3 月)
新規協定大学・インターンシッププログラム開拓
　インド(3 月)
英語研修及びＡＵＧＰ（フィリピン）/ＡＵＥＰ（交換留学）
　フィリピン(3 月)

平成 26 年度　活動報告(時系列)

前期４月

■時期・概要（項目）
- ○グローバル・ビジネスリテラシーシステムを継続利用
- ○グローバル・ポートフォリオシステムの導入
- ○海外留学フェアの開催
- ○就業規則等関連主要規程の翻訳開始
- ○SNS の継続利用と多言語ホームページでの情報発信開始

■計画内容
- ○グローバル・ビジネスリテラシーアセスメントシステムの継続利用により、学生達の留学成果を明確化する。
- ○グローバル・ポートフォリオシステム（manaba）を新規導入、各学生の学習履歴等を記録し、各教員の学生指導のためのツールとする。
- ○学内の国際交流ラウンジで海外留学フェアを開催、留学希望者のさらなる増加をはかる。
- ○本学就業規則等の主要部分を英語翻訳し、外国人教員の採用活動の際に利用する。
- ○前年度までに構築済みの多言語ホームページや SNS による､国内外への情報提供をさらに本格化する。

■活動実績
- ○グローバル・ビジネスリテラシーアセスメントシステムを利用し、留学等の目的を明確化し､留学先大学での中間指導を行った｡また、留学先大学（サンディエゴ州立大学）への留学生（選抜学生 5 名：2014 増加分）には情報端末 iPad を活用した研修を実施し、アセスメントシステムへのアクセスを含む現地での積極的活用を指導した。さらにより効率的に中間指導を行うため、アセスメントシートの内容、及びマニュアルを英訳し、その利便性を高めた。
- ○平成 26 年度より入学する学生を対象に、ポートフォリオシステム（manaba）を新規導入したことで､教員による TOEIC®等試験の点数管理が可能となった。
- ○大学内の国際交流ラウンジにて約 1 ヶ月の海外留学フェアを開催し、説明会や特設ブースでの相談や案内冊子の配布や留学促進を目的とした動画の配信等により、留学の情報提供や啓発をおこなった。マレーシアでの短期留学プログラムではゲストスピーカーを招き講演を行った。
- ○就業規則の英訳が完了し、元々教員採用時に利用していた雇用契約書（日英併記）と合わせて、赴任前オリエンテーションを含む採用活動に活用した。
- ○SNS を利用し、様々な留学等のプログラムを紹介した。多言語ホームページを利用し、学内外で行われている様々なイベントの様子を伝え、適時な情報発信をおこなった。

前期４～７月／後期１０～１月

■時期・概要（項目）
- ○英語能力測定試験及び地域言語能力試験の実施
- ○多言語チューターの活用

■計画内容
- ○英語以外の地域言語の伸長度を測定するために、各言語の検定試験を実施する。同様に、最終学年の英語力の伸長度を測定するために 4 年生全員を対象に TOEIC®試験を実施する。
- ○英語やその他地域言語のチューターを活用し、学生達に効率的な勉強方法を習得させる。

■活動実績
- ○最終学年の英語力の伸長度を測定するために 4 年生全員を対象に TOEIC®テストを実施した。さらに本年度から、スペイン語及び韓国語の履修生を対象に、両言語の公的検定試験を受験させた。
- ○本学部が重視する地域言語（英語以外のアジア系言語）の伸長度を測定するために、インドネシア語、中国語の受講生に対し、両言語を母語とするチューターを活用しつつ授業を運営する体制を継続し、この言語の公的検定試験を受けさせた。

前期４～７月／後期９～１月

■時期・概要（項目）
- ○キャリア関連授業（海外授業参加予定学生向け含む）の実施

■計画内容
- ○キャリアカウンセラー等の専門家による、前・後期（各期 15 回）のキャリア関連授業（マナー研修等含む）を開講する。本講義では、学生達が各自で将来の方向性を考えられるように、企業動向等だけではなく、目的意識の重要性等を意識させる。

■活動実績
- ○本事業採択学部専門のキャリアカウンセラーを採用・配属し、キャリア関連研修を実施した。国際関係学部で、夏季休暇中を利用した国内インターンシップ（Iship）を実施した。また、「留学+インターンシップ」という形式で海外プログラム参加者を対象に、専門機関に委託し、マナー研修を実施した。2015 年度 4 月オープン予定の ASIA PLAZA（ラーニング・コモンズ）で、英語を中心とした語学やキャリアに関して学生たちが主体的に学ぶことのできる環境創出のため、専門家とのコンサルティングを開始した。

前期５月

■時期・概要（項目）
○国際教育交流年次大会への参加
○危機管理シミュレーションの実施

■計画内容
○効果的な協定校の増加を目指すべく、国際教育交流 2014 年度大会に出展し、参加大学とのネットワーキングを構築し、その後の協定締結を目指す。
○平成 25 年度前に完成させた、危機管理マニュアルを利用し、学内において不測の事態を想定した危機管理シミュレーションを実施する。教職員の危機管理意識の向上も図る。

■活動実績
○５月にサンディエゴで開催された「国際教育交流年次大会＝NAFSA」に参加し、ブース出展し、本学の協定校が少ない地域、特にヨーロッパの大学と意見交換を行い、。翌３月には北京で開催されたアジア太平洋地域の国際教育交流団 APAIE 主催による年次大会にも参加し、中国をはじめ海外大学との情報交換をおこなった。アメリカの多くのコミュニティーカレッジとのコンタクトを図った。
○危機管理専門の民間企業に委託し、本学の学生が海外活動中に事故が発生したと想定し、新たに作成した危機管理マニュアルを基に、マスコミ対応までも含む、危機管理シミュレーションをおこなった。危機管理ハンドブック（学生用）、危機管理ガイドライン（留学・研修版）を作成し、学生、教職員に配布した。

前期５～７月／後期１０～１２月

■時期・概要（項目）
○TOEIC®（学生･職員向け）専門講師（外部）による講座開催

■計画内容
○学生の英語能力向上をはかるべく、TOEIC®外部専門講師による課外授業を開講し、本補助事業で目標としている英語能力レベルの達成に向けて課外教育を強化する。また、職員の外国語運用能力向上の観点から、同様に外部講師による授業を開講する。

■活動実績
○学生の英語能力向上を図るべく TOEIC®外部専門講師による課外授業（各学年に対応、また 500 点以上を目指す初級クラスから 700 点以上を目指す中級クラスまで目的別に開設）を開講し、本補助事業で目標としている英語能力レベルの達成に向けて課外教育を強化した。また、職員の外国語運用能力向上の観点から、外部講師による英語力強化の為の課外講座を開設、実施した。また、選抜制による交換留学を目指す学生を対象とした TOEFL®対策講座も開いた。

夏季休暇中８～９月

■時期・概要（項目）
○海外授業（インターンシップ、フィールドスタディー）の実施
○協定大学等短期留学生研修の実施（他大学との共同実施含む）

■計画内容
○本年度より開講される海外授業（海外インターンシップ、海外フィールドワーク）を実施し、その実施状況を現地にて把握する。
○協定校からの短期留学生を受け入れ、日本語・日本文化に関する研修を実施する。

■活動実績
○夏季休暇中（３週間～１か月間）を利用し、香港、中国（深圳）、韓国、マレーシア、シンガポール、アメリカで「多文化インターンシップ」を、中国、韓国、フィリピン、ベトナムで「多文化フィールドスタディー」を実施し、合計 41 名の学生が参加した。
○協定大学等短期留学生研修では、インドネシアの協定校から９名が来日した。また都内５大学共同で行った短期留学研修では、アメリカ、台湾、中国から合計 11 名が来日した。

夏季休暇中８～９月／春期休暇中２～３月

■時期・概要（項目）
○留学先への出張における学生面談指導及び企業視察による研修状況の確認
○職員対象語学研修
○協定校視察研修
○海外でのオムニバス講義の講師依頼・調整のための出張

■計画内容
○本学独自のグローバル・ビジネスリテラシーアセスメントシステムは、留学の前、期間中、帰国後の各時点で効果測定を行うのが特徴である。AUAP（アメリカ留学）・AUGP（世界 13 の国・地域への留学）実施国の中から重点校に教職員が赴き、学生達に直接指導を行い、留学中の目標管理の進捗状況を把握し、学生達のモチベーション維持を図る。
○サンディエゴ州立大学においては、現地の社会文化やコミュニティーの特徴などをテーマに、「多文化社会セミナー」を開催し、現地の事情に精通させたうえで、日系企業を含む在サンディエゴ企業で２日間かけて視察し、各社の事業内容等のレクチャーを受ける「企業視察ツアー」を実施する。
○事務職員の外国語力向上のため、海外研修を実施する。
○本学若手職員が協定校を訪問し、現場での教育内容、異文化生活などを視察して高校生やその保護者等への効果的な情宣活動が可能になるようにする。

○海外授業のプログラムの一環として、現地日系企業代表者等によるオムニバス講義を実施すべく、意見調整等のために出張する。

■活動実績

○AUAP（アメリカ留学）・AUGP（世界 13 の国・地域への留学）実施国の中から、重点校に教職員が赴き、アセスメントシステムの利用を促した。さらに、サンディエゴ州立大学では、「多文化社会セミナー」を実施し、多文化共生地域で仕事をしている人たちとの意見交換おこなった。アリゾナ州立大学では、「企業視察ツアー」を実施し、日本との関連が深いグローバル企業を５社訪問した。

○職員の語学能力向上の為に、８月に１名のスタッフを協定校であるサンディエゴ州立大学に派遣（短期留学）した。

○米国ワシントン州にある協定校には、3 名のスタッフを派遣し、現地の授業・生活環境等を視察せしめた。新規協定校及び新規インターンシップ先獲得の為、インド（デリー、バンガロール、チェンナイ）、フィリピン（マニラ）、韓国（ソウル）に、それぞれ教職員が出張した。

○中国においては現地日系企業 13 社の代表を訪問し、現地オムニバス講義「中国の仕事と生活」の講義内容の打ち合わせとスケジュールの調整をおこなった。

後期１０～１１月

■時期・概要（項目）

○海外授業経験者発表会の開催

○グローバル企業・業界研究等セミナー開催

○国内外キャリアフォーラムへの参加

■計画内容

○海外授業を体験した学生に、その内容を纏めさせ、他大学の学生と合同で発表会を実施する。また、企業担当者等にも案内し、多方面から意見聴取する。

○キャリア関連授業の一環として、グローバルに展開している企業を学内に招き、業界研修セミナーを開催する。

○国内外でのキャリアフォーラムへ参加し、企業との効率的な意見交換、また本学のグローバル人材育成プログラムの紹介を行う。

■活動実績

○多文化インターンシップ・多文化フィールドスタディー（多文化マーケット含む）参加者全員が参加する成果発表会を実施し、本学との関係が深い企業関係者にも参加を依頼し、社会人からの評価等を得ることとした。また、その中から数名は、他大学の代表者と合同のインターンシップ成果発表会でも、各人の成果を発表し、そのうち１名は、外部出席者から高評価を得ることができた。

○グローバル企業業界研修セミナーについては、採択学部専門のキャリアカウンセラーが、グローバル企業社員に研修参画を依頼し、「グローバルで仕事をすること、そのために必要な能力」というテーマで、インタラクティブな授業を行った。

○キャリアフォーラムへの参加は、学内でのグローバル企業説明会の開催により、できなかった。また、年間を通じて積極的に他大学主催のセミナーやワークショップ等へ参加し、情報共有・意見交換を行った。

後期９～３月

■時期・概要（項目）

○グローバル・ビジネスリテラシーデータ収集

■計画内容

○在学中に留学、海外インターンシップ、海外ボランティアなど様々な経験をした学生のグローバル・ビジネスリテラシーの成長度を確認する。

■活動実績

○前期（２月～７月）留学組、後期（７月～２月）留学組、その他夏季・春季休暇中に留学する学生に対し、帰国後オリエンテーションを実施する中で、アセスメントのデータ収集をおこなった。特に「アジア夢カレッジ」に参加した学生は、インターンシップ先企業担当者にも同じ評価軸で評価を依頼し、より客観的なデータを収集した。データ収集に関しては、本学スタッフ（２名）に専門的知識を習得させるために研修を受講させた。

その他

■時期・概要（項目）

○実施状況の精査と年次報告書の作成、国内外への情報発信多言語ホームページ等の更新作業の実施

■計画内容

○外部からの評価も踏まえ、事業の実施状況を精査し、年次報告書を作成し、本取組の国内外への公表・普及とあわせ、他大学等の成果との比較・検討を行う。

■活動実績

○11 月に実施された中間評価を踏まえ、次年度（27 年度）に向けての効果的な事業実施の為に、委嘱した外部評価委員を訪ね、意見交換をしつつ、改善点等を把握し、平成 25 年度版事業報告書、さらに事業紹介冊子の発行、事業専用ホームページの改定を行い、その内容をホームページにて社会一般に公表した。

○GGJ（Go Global Japan）イベントにブース出展し、多くのブース訪問者に対し、本事業のアピールだけでなく、本学の国際交流プログラム全体の紹介を行った。また、本学の説明会会場では、留学やインターンシップを経験した学生が発表した。さらに、主催大学のラーニング・コモンズを視察した。

○ 科目趣旨の追加分（英訳）を含め、多言語ホームページの更新・ニュース配信をおこなった。
○ 他大学との意見交換および情報提供を行った。
○ 「グローバル化に挑戦する大学」、「親と子のかしこい大学選び」、「読売新聞（2015 年 1 月 29 日）GGJ 特集ページ」へ、本学の取り組み内容の記事を掲出した。
○ 多文化コミュニケーション学科では必修である地域言語の履修において、学生が語種を適切に選択できるように授業で開設する言語の情報（文字、使用される地域・国家、使用人口、文例、発音など）をコンテンツとする DVD を作成（増刷）した。また、同学科の学生が学習の成果を記録し、将来の学習計画を立案できるような携帯用の記録帳を作成した。他方、国際関係学科では、学習・課外活動・検定資格等の記録をするための成長記録ファイルを作成した。
○ 初めて英文大学案内のコンパクト版を作成し、配布できるようにした。アメリカの多くのコミュニティーカレッジとのコンタクトを図った。

推進本部会活動実績

第５回　（本年度第１回）期日：平成 26 年４月２日（火）

＜報告・確認事項＞

○推進本部会の新メンバーについて
○平成 24 年度事業額の確定について
○平成 25 年度実績報告書の作成と提出について
○平成 26 年度事業調書について
○スーパーグローバル大学創成支援プログラムについて
○危機管理体制について
今夏の海外授業脱向けた体制、マニュアル、ガイドブック、規定等の見直しと作成作業

＜今後の予定＞

４月中　マニュアル暫定版の作成
５月中　危機を想定してのシミュレーション→マニュアル完成
６月～７月　学生への危機管理研修
８月　海外授業出発

第６回　期日：平成 26 年６月 10 日（火）

＜報告・確認事項＞

○平成 26 年度事業計画と予算について
○海外インターンシップの扱いについて
○平成 25 年度中間評価調書の提出について
６月 27 日（金）必着（郵送）
○「海外危機管理マニュアル」と「危機管理ガイドライン」について
①事前研修及び授業での使用等について
②学内会議体での報告（周知）について
○本部会→本部会メンバーの確認（修正・意見等は６月 17 日までに）→国際交流委員会、学部長会（６月 25 日）→事務部長会（７月８日）→７月 16 日）
③シミュレーションの実施について（７月を予定）
○その他

第７回　期日：平成 27 年２月 25 日（水）

＜報告・確認事項＞

○平成 27 年度内定調書について
○平成 25 年度までの中間評価調書及びヒアリング調査による中間評価結果について
○最終年度（28 年度）終了後の運営について
○シラバスの多言語化について
○ナンバリングについて
○危機管理シミュレーションの全学的な整備と外部専門機関との連携について
○東日本第２ブロックイベントについて

ワーキンググループ活動実績

第 16 回　（本年度第 1 回）期日：平成 26 年 7 月 9 日（水）

＜議題＞

１.平成 26 年度調書と事業展開について
２.平成 25 年度中間評価調書について
３.平成 25 年度成果報告会並びに事業報告書について
①成果報告会の開催
②事業報告書の制作進捗状況
４.危機管理シミュレーションについて
５.その他
①11 月の学生報告会（インターンシップ、フィールドスタディー）
②12 月のイベント（12/6＝明治大学、12/21＝関西学院大学）

第 17 回　期日：平成 26 年 9 月 30 日（火）

＜議題＞

１.中間評価ヒアリングの実施について
　10 月 8 日（水）於　日本学術振興会
２.平成 25 年度事業報告の進捗状況と評価について
３.今後の予定について
①東日本第 2 ブロックイベント：12 月 6 日（土）於　明治大学
②Go Global Japan Expo：12 月 21 日（日）於関西学院
４.メンバーの変更について
５.その他

第 18 回　期日：平成 26 年 11 月 25 日（火）

＜議題＞

１.平成 25 年度事業報告書について
２.平成 26 年度出張報告書について
３.平成 26 年度予算執行状況について
４.平成 26 年度/平成 27 年度予算について
５.学外イベントについて
６.その他

第 19 回　期日：平成 26 年 12 月 16 日（火）

＜議題＞

１.平成 27 年度予算について
２.その他

第 20 回　期日：平成 27 年 2 月 26 日（木）

＜議題＞

１.平成 27 年度内定調書について
２.中間評価結果について
３.その他

多文化インターンシップ

■目的

多文化コミュニケーション学科で習得した「多文化の中で行動する術」を実践しつつ、実際の職業体験を通して、（1）職業観を確立し将来のキャリア選択の一助とする（2）職業に関わる技能や技術を習得する（3）就業に関わる人的交流の中で社会人としての能力を養う（4）就業場所、就業時間以外での生活を通して、当該国に関する実践的かつ総合的な学習を行うことを目的とする正規科目（半期2単位）である。学生は大学で学習・習得した能力を応用的・実践的な形で発揮する機会を通してグローバル人材としての能力を養う。

■実績

平成26年度、多文化コミュニケーション学科において初めての海外インターンシップを実施した。前期15回の事前授業（水曜日5時限）と夏季休暇中に実施するインターンシップで構成される。カリキュラム上、専門の選択科目で合格すれば2単位が付与される。また、当地での博物館や歴史的建造物などの見学を通して、幅広い見識を養うことも目的の一つとした。自由選択科目、企業受け入れ枠と履修希望者との数的ミスマッチの可能性を考慮し、その場合、次の基準で選抜することをあらかじめ学生に周知した。

（1）就業意識の高さ（将来、国内外の国際性のある職種、業種への就職を希望し、それに向けての研鑽を積もうという高い意識のある方＝以下すべて面談と書類で）

（2）人間としての成熟度（生活態度、受講態度、マナー、コミュニケーション能力など）

（3）社会に対する意識（ニュースや現在の政治、経済、社会、国際状況に関する敏感度）

（4）語学力（中国語、韓国語、英語の公的資格の点数や級）

（5）学業成績（GPAを利用＝書類審査）と履修状況

これらを含む「実施概要」を配布し、前年平成25年度に説明会を行い、希望者を募り、申込受付を行った。この結果、平成26年4月の授業開始時点で23名が履修登録した（最終参加者は22名）。

まず、前期15回の授業では、書類作成方法（日英）、履歴書の書き方（日英）、社会人マナー（外部講師）、プレゼンテーション、コミュニケーション力育成、経済や経営の理解、企業組織の理解、インターンシップ実施各地域事情理解、時事問題の把握などを行った。さらに、リスク管理やリスク回避に関しての指導もこの時間帯で行った。

実施場所は、中国広東省（2企業＝ともに製造業）、香港（1企業＝アパレル産業）、韓国・ソウル特別市（2企業＝コンサルティング、アドバイザリー団体）、シンガポール（5企業＝不動産、現地向けメディア、国際メディア、損害保険、コンサルティング）、マレーシア・ペナン州（3企業＝いずれもエレクトロニクス系製造業）であった。実施場所、企業により期間は異なるが、3月から9月にかけて夏季休暇中の数週間を利用して現地の企業で、現地語で就労経験を積ませた。今次のインターンシップで用いた言語は中国語、英語、韓国語、日本語であった。

インターンシップ実施中、毎日就業記録をつけさせ、かつ終了後にはレポートの提出を義務付けた。

■総括

参加者は全員当初のスケジュールどおりインターンシップを行い帰国した。また、この間大きなトラブルもなく概ね当初の目的通り実施できた。受け入れ企業からは学生の取り組みを評価する声が多くあったが、就業意識が低い、などの要改善点の指摘もあった。これらの意見を分析して次年度の事前研修のために活かしたい。学生はインターンシップ終了後、習得したもの、反省点などをまとめプレゼンテーションを行った（学外者聴講可）。これによって、大学内外の関係者のコメントを得ることができた。さらに、このプレゼンテーションは次年度の参加学生への情報提供にもなった。このような、グローバル人材育成の好循環も期待できる。初年度につき、出発・帰国とインターンシップ導入部分を教職員の随行の下に実施したが、事業の定着とともに学生の自律的な行動を促すような仕組みを確立してゆく必要もあるだろう。

多文化フィールドスタディー

■目的

外国語学習と並ぶ多文化コミュニケーション学科における学びの柱である「フィールドワークによる現地体験型学習」のために開設されたのが本プログラムである。入学後、学生達は1年次に「フィールドワーク入門」「オリゼンテーションゼミⅡ」で日本国内でのフィールドワークを経験し、そのうちの30名弱の学生が今回、2年次前期のAUAP（亜細亜大学アメリカプログラム）を経て、3年次に入学以来学んできた英語および地域言語を使用して、引率教員の指導の下、海外でフィールドワークを行なった。その目的は、（1）

自ら課題を設定する、（２）自文化と異文化の差異を見極める、（３）現地社会を理解する、（４）あらゆる問題に果敢に挑戦する、（５）様々な失敗を克服する、（６）獲得した資料を分析する、（７）大勢の前で堂々と発表できる等、グローバル人材に求められる資質を、現地体験を通じて涵養することにある。

■実績

通年科目として開設された本プログラムでは、今年度、前期の国内での派遣準備のための研修を踏まえ、夏休みの期間中、韓国、中国、ベトナム、フィリピンで現地フィールドワークが実施された。後期には地域毎に現地調査データの集計、分析が行われ、その結果は 11 月 3 日に実施された「海外成果報告会」で地域毎に報告され、報告会終了後の調査結果は報告書として纏められている。現地調査は派遣地域ごとに以下の内容で実施された。各派遣の実施内容については、担当者による海外出張報告に詳細な記載があるので、海外出張報告を参照されたい。

１．韓国；期間：８月 17 日から８月 23 日、調査地域：韓国ソウル市、参加人数：11 名、実施内容：「日本と韓国の若者文化」を共通コンセプトに、11 名の学生がそれぞれのテーマで各自 50 名の韓国人にアンケート調査を実施した。

２．中国；期間：８月 24 日から８月 30 日、調査地域：中国北京市、深圳市、参加人数：５名、実施内容：「中国におけるインターネット消費」をテーマとしたアンケート調査を実施した。

３．ベトナム；期間；８月 17 日から８月 24 日、調査地域：ベトナム、クアンナム省ホイアン市、参加人数：７名、実施内容：「世界遺産ホイアンの観光と地域文化」をテーマに参与、観察ならびにアンケート調査を実施した。

４．フィリピン；期間；９月４日から９月 18 日、調査地域；フィリピン、マニラ市及びセブ市、参加人数：５名、実施内容：現地大学（サンカルロス大学）での特別講義並びに現地学生との「セブを中心とした社会開発と変化」をテーマとした合同フィールドワークを実施した。

■総括

今年が初年度となる「多文化フィールドスタディー」にとって、今年度は大きな成果を収めると同時に今後に向けた貴重な経験も残した。

前期での派遣準備に始まり、夏休み中の現地調査、後期の調査の取りまとめと報告会でのプレゼンテ―ションと、１年間に渡る海外研修プログラムを派遣４地域で成功裏に実現出来たことは、なによりも最大の成果である。また留学とは異なり教員が企画した海外体験型の教育プログラムを教員自らが実施し、そこから（１）派遣前の学生意識ならびに現地認識の変化、（２）現地での異文化体験による学生の成長、各種トラブル対応、（３）帰国後の報告会に向けた異文化体験の言語化作業等を経験し、教員自身がオーガナイザーとして成長できたことは、今後「多文化コミュニケーション学科」が新たな現地体験型の学習プログラムを開発してゆく上で貴重な一歩となった。

今後に向けて（１）「多文化インターンシップ」との開設時期の重複、（２）学生の費用負担、（３）学生の報告会に向けた調整（多くの参加生が同時期に学園祭で開催された「多文化ミュージアム」の主たる担い手となっていることからくる、報告会に向けた負担の調整）、（４）夏休み期間中の実施からくる教職員の支援面での負担、（５）次年度参加者への広報活動等が課題として残ったが、外国語教育と専門教育とを総合し、学科の教育理念を実現する科目として海外フィールドスタディーが今年度順調にスタートしたことの意味は強調して余りあるものである。今後は、１年次にスタートする外国語教育、専門教育が２年次以降の海外留学を経て、学生の意識および教職員の支援体制の面で、いかに効率的かつ一気通貫的に３年次のフィールドスタディー並びにインターンシップといった海外体験に繋がってゆけるかを担当者が中心となり学科として検討したい。

多文化マーケット

■目的

多文化マーケットは、多文化コミュニケーション学科に開設されている６つの地域言語がカバーする地域（朝鮮半島、中国大陸、東南アジア、南アジア、西アジア、ラテンアメリカ）の文化をその地域のマーケット（市場）を再現することにより、学生たちにグローバル時代の伝統文化のあり方について高い目的意識をもって考えさせること、また自ら企画を提案、会議運営、共同作業、課題発見、修正・解決、実施、評価の分析というアクティブ・ラーニングを学科全体として実施する試みとして位置づけられた。

■実績

2014 年度は学科の第１期生が３年生となり、それぞれの目的意識と将来設計に基づいて３つのエリアに分類されている専門選択科目を履修する時期に当たる。学科設立時から３年後のこの時期を目標として学生たちにこの実験的な企画に参画させる準備を行ってきた。３年生が中心メンバーとなり、学年の垣根を越え学科に所属する学生全員参加型の企画として実施体制を整えるとともに、広く学内外からの評価を受けるため、体験型授業（多文化フィールドスタディーや多文化インターンシップ）報告会が実施される大学祭の時期に実施することとした。

１教室を使用し、ダンボールで区分したエリアに６地域を配置し、地域言語履修者や体験型学習

を経験した学生の協力を得て、マーケットを再現した。

また６地域とは別個に多文化広場と名付けたスペースを設け、留学生による自国文化の紹介、留学体験者による報告会を実施し、グローバル人材についての問題意識をさらに高めることを目指した。

■総括

事前の広報活動に十分時間を割くことができなかったにもかかわらず、学内外から予想以上に多くの来訪者を迎えることができ、学科とグローバル人材育成教育に関する関心の高さを感じさせられた。また学科の教育方針が学修と発信の両立にあることを学生、教員ともに確認できたことは大きな成果といえる。

マーケットの再現作業に関しては、全体像と個別エリアのコンセプトの共有、再現手順、チェックポイント、修正を経て完成に至る過程を多くの学生が体験することができ、物作りの意味について理解を深めるとともに学修成果の発信の方法について学ぶことができた。加えて、学年を超えて多文化理解とグローバル人材としての視点の重要性について認識が深まった。

こうした学科所属学生全員の参加を前提とした発信型成果発表を継続的に実施するために、今後留学や体験型授業の成果報告との連動性をさらに密にすることが求められている。

また本企画の趣旨を学生たちに理解させるためにＡ４サイズ１枚の広報紙『多文化便り』を適宜発行し準備状況を公開し、課題の整理を行った。この広報活動は、本企画の趣旨について学生、また教員の理解を深めるうえで大きな役割を果たしたが、こうした広報活動の強化も今後一層重要となるであろう。

学習・活動記録ファイル

■目的

国際関係学科の学習・活動記録ファイルは学生自身が入学後１年前期から４年後期まで半期ごとの目標を設定し、それに沿った学習や活動の内容、および英語（TOEIC®）スコアや各種資格取得などを記録し、努力の成果を確認することを通して、教員と学生がグローバル人材としての成長度（あるいは停滞度、反省点）と次の目標・課題を明示的に把握する目的で作成されている。また、各学年のクラス担当教員が学生情報をシェアし、適切な指導のために利用することも目的の一つである。

■実績

学習・活動記録ファイルを「ポートフォリオ」と呼び、Ａ４サイズの二穴綴じファイル形式で作成している。毎年４月、新入生全員に配布し、グローバル人材としての将来設計とそれに向けたセメスターごとの目標を定めて、記録させる。定期的な記録項目（記録時期）は次の通りである。

（1）セメスターの目標（セメスター当初）
（2）GPA　取得単位の成績によるポイントの平均（セメスター終了後）
（3）目標に対する反省（セメスター終了後）
（4）提出したレポートタイトル（セメスター内随時）
（5）ゼミ（必修）教員名（セメスター当初）
（6）授業以外の学業関連活動（留学、英語学習、インターンシップなど）の記録　（セメスター内随時）
（7）学業以外の学内活動　（セメスター内随時）
（8）学外活動　（セメスター内随時）

その他、漢字検定、TOEIC®とそれ以外の英語検定試験、SPI などの受験日と合否（あるいはスコア）記載欄を設けている。

学生は、教員の指導に基づき定期的に上記の到達目標（セメスター開始時）や成果（セメスター終了時）を記録する。また、TOEIC®の結果返却時にもそのスコアを記載し、方眼紙にマークする（第８セメスターでグラフが完成するようになっている）。このような様式になっている記録帳部分加え、返却されたレポート等をバインドすることも可能となっている。平成 26 年度には、各セメスターで２回、教員がチェックを行い、学習の状況を把握し、問題があれば改善の指導を行った。

■総括

本年度導入した学習・活動ファイルの有効性の把握のために、学生に対して以下のアンケートを行った（カッコ内は平均スコア、５点満点）。

＜設問 1＞学習･活動記録ファイルは入学からこれまでの行動の記録に有用でしたか（3.40）
＜設問 2＞TOEIC®スコアおよび資格試験結果の自己把握に役立っていますか（4.22）
＜設問 3＞『マーフィーの英文法』の進捗状況を確認するのに役立っていますか（4.33）
＜設問 4＞学科からの配布書類（各種案内など）を整理するのに役立っていますか（4.27）
＜設問 5＞授業の課題や資料を整理するのに役立っていますか（4.23）
＜設問 6＞学習･活動記録ファイルは今後も有効に活用していけると思いますか（4.11）

このアンケートの結果、学生は有用性を感じていることが分かった。今回の学生の主観的評価に加え、今後、ファイル導入以前と比較した学生の学習成果、すなわち GPA の点数、資格取得者数、検定合格者数や率、TOEIC®スコアなどが改善されたか等を把握し、グローバル人材育成上の有効性を確認する必要がある。さらに、学生の本ファイル利用に関する意識の向上、利用方法の改善・工夫なども必要となる。

学習成果記録帳

■目的

学習成果記録帳は、国内外における学生の学習・活動の内容や成果を記録することにより、多文化コミュニケーション学科の設立理念を理解し、学習意欲を高め、グローバル人材としての将来設計を具体的なものとするために作成、活用している。

■実績

学習成果記録帳は、体裁をパスポート型とし、通称を「多文化パスポート」としている。

毎年４月、新入生全員に配布し、記録帳を携帯する意味を以下の３点に絞って説明するとともに、２年次と３年次のゼミ登録時には担当教員に提示してチェックを受け、グローバル人材としての将来設計について目標を定める必要があることを伝えている。

（１）国境を越えて学習・活動の場を見出すグローバル人材（多文化人）を養成する学科のシンボルとして携帯することにより、大学内での自己のアイデンティティを確立する。（２）学習・活動成果を記録することにより、大学生活における自己の目標と達成度を確認し、客観的視点から自己評価を行なうとともに次の学習・活動課題に対する問題意識を高める。（３）就職活動をする際に、この記録を元にして大学生活をまとめ、履歴書作成や自己アピールなどで有効利用できるようにする。

学生は、教員の指導に基づき定期的に、または自らの申告に基づき適宜、語学留学、TOEIC®のスコアや地域言語（学科に開設されているアジア及び中南米諸言語）の到達目標や成果、また国内外のフィールドワークやインターンシップ、ボランティア活動、その他学科が必要と認めた学習及び活動成果を、シールを貼ることにより記録する。

シールは主に言語・現地体験型学習系（TOEIC®や英検、地域言語、留学、海外フィールドワークやインターンシップ、等の成果を示すもの）と活動系（学内外の多文化やグローバル活動等の成果を示すもの）と授業系（授業内で扱う多文化、グローバル人材、将来設計学習等の成果を示すもの）に大別されるが、内容とレベルに応じて得点を定めている。通常、言語・現地体験型学習系と活動系は授業系のものよりも高い得点とし、学生の言語学習、留学、国内外での活動への積極的な関わりを促すことを目指している。

■総括

学習成果記録帳は、この３年間を通じて多文化パスポートとして学生に認知されてきているが、その有効利用についてはいくつか検討の余地が残っている。将来設計について学期ごとに意識させるために 2013 年には、TOEIC®スコア記録グラフと毎学期の修得単位確認表のページを設けることによりさらに機能的な記録帳となった。

記録帳に対する学生の意識をより高めるため、学科の完成年度である 2015 年度にはシールに基づき４年間の得点を集計し、高得点者を卒業時に表彰することとした。また３年次生について、前期初めに一度得点を集計し、中間発表として高得点者とその具体的な成果内容を公表し、この記録帳の役割について理解を深めさせることにした。さらにこうした上級生への指導を見せることにより、２年次生、１年次生の意欲を高め各自の目標を自覚させる計画である。

この表彰制度については、年次による表彰と年次にこだわらず分野別、特に、言語・現地体験型学習系分野における目標設定とその成果に対して実施することも検討課題となっている。

英語および TOEIC®

■目的

（１）１年生を対象とする英語課外講座を開設し、授業外での英語学習機会を増やし、あわせてTOEIC®対策にある程度特化した内容を学ばせることで、全般的な TOEIC®得点力の引き上げを目的とした。

（２）２年生を対象とする課外講座では、アメリカ留学前（国際関係学科）と留学後（多文化コミュニケーション学科）に、いわゆるシャドーイング方式を主眼とすることで、リスニングおよびスピーキング能力強化を軸としつつ、TOEIC®得点力を向上させることを目指した。

（３）英語チューターリングでは、原則としてTOEIC®ベストスコア 500 点以上の学生を対象に、700 点を達成するための、テクニカルな訓練を中心に、チューター（高得点を取得している上級学年学生）による指導を実施した。

■実績

TOEIC®等の英語課外講座（４講座）を年間で延べ 224 名が受講した。このうち１年生向けのTOEIC®講座には 120 名（国際関係学科 83 名、多文化コミュニケーション学科 37 名）が参加した。一回３時間（午後６時より９時まで）、週２回、９週間というハードなスケジュールにもかかわらず、平均してほぼ８割程度の出席があった。留学前後講座は 109 名の参加、どのクラスでも高い出席率を示した。

チュータリングには48名の参加があり、８クラス（時間帯）の編成できめ細かな指導が可能となった。とくに、文法力の強化をめざし、ポイントの復習および解答練習 TOEIC®対策のテキストを用いて行った。

■総括

１年生については、４月入学時とその後のベストスコア（翌年１月まで）の伸びを比較すると、受講者（平均）については68点（336点が404点に）、非受講者については48点（349点が397点）と20点の差となった。これは受講者が英語学習に熱心に取り組んだ結果であり、課外講座が一定の役割を果たしたものとみなしうる。

英語チュータリングについては、少人数での指導が可能であったため、受講生にとっては各自のペースとレベルに合わせて学習を進めることができ、受講生には概ね好評であった。また学習方法のアドバイスも指導を担当して高得点取得者から与えることも出来たが、総時間数が少なく効果に関しては課題が残る状況であった。

総合的に見れば、平成27年１月末現在で、国際関係学部４年生のうち、17.2%はTOEIC®700点以上取得、48.2%が600点以上を取得、72.9%が500点以上を取得した。

これらの数字は、多様な課外講座設定が学生の英語力強化のうえで、効果をあげていることを示唆している。一方で、少数ではあるが講座を途中でリタイアする者のあること、また後期講座については、学園祭ほか学生行事が組まれていることもあり、参加者が減少するといった課題も残されている。

他の語学と同じく、英語学習は継続が基本であり、そのためのモチベーションをいかに維持するかがカギとなる。英語授業のみならず学内において日常的に英語を使う機会をどのように増やしていくか。また海外インターンシップ等において、仕事と生活のうえで、英語力が不可欠なことを体感としていかに理解させるか。これらを含め、総合的な観点からの英語力強化の仕組みを構築することが今後の大きな課題である。

地域言語・チューター実績ならびに検定料補助

■目的

多文化コミュニケーション学科にとって英語がFE、AUAP等正規の授業により多くの学習時間が確保されている一方、地域言語は週３コマ（初中級）と学習時間が少ない。このため地域言語において学生が一定の語学レベルに到達するためには、授業以外における自主学習が欠かせず、本項目の学習支援を通じ学生が学習意欲を喚起、維持することを期待した。

■実績

１．チューター

インドネシア語中級クラスにおいては、インドネシア人の留学生がチューターとしてインドネシア語学習の補助を行った。日本の文化紹介のプレゼンなど毎回異なるテーマを設定し、少人数のグループワークを行ったあと、全体でインドネシア語をつかい発表・質疑応答するなど、アクティブ・ラーニングとネイティブ・チューターとを組み合わせ、より実践的なインドネシア語が身に付くような工夫を行った。

２．検定料補助（言語別）

（１）実施内容

・韓国語（韓国語能力試験）

受験者24名（内訳…上級（６、５級）１名、中級（４，３級）９名、初級（２，１級）14名）

合格者17名（内訳…上級５級１名、中級３級２名、初級２級８名、１級６名）

・中国語（中国語検定試験）（自己負担受験を除く）

受験者23名（内訳…準１級１名、２級９名、３級13名）

合格者６名（内訳…準１級１名、２級１名、３級４名）※３級合格者中１名は「アジア夢カレッジ」生のため実績数に含まれない。

・インドネシア語技能検定試験

受験者47名（内訳…A級１名、B級３名、C級４名、D級16名、E級24名）

合格者27名（内訳…A級０名、B級０名、C級０名、D級７名、E級19名）

・スペイン語技能検定

受験者12名（内訳…３級１名、４級３名、５級６名、６級２名）

合格者８名（内訳…３級０名、４級２名、５級４名、６級２名）

（２）実績（2014年度到達目標級以上取得者）

韓国語３名、中国語８名（うち３名自己負担受験）、インドネシア語０名、スペイン語２名

※到達度目標級：韓国語（韓国語能力試験３級）、中国語（中国語検定試験３級（但し「アジア夢カレッジ」２級）、インドネシア語（インドネシア語技能検定試験B級、スペイン語（スペイン語技能検定試験４級）

■総括

（１）成果

2015年度の完成年度を前に、地域言語については2014年度に13名の学生が各言語の到着目標級以上に到達した。計画書に掲げた目標値である到達率30%で計算した目標人数33名（定員110名）中13名を地域言語が貢献したことになる。

（2）今後の方向性・課題

昨年度、到達目標級に到達しなかった学生であっても、一ランク下の級に合格しているケースが多い。このため 2015 年度も引き続き支援して行けば、こうした学生についても到達目標級での合格が期待出来よう。またこれまで検定試験の受験級・回数について言語間に統一した方針がなかった点については、調整の結果、言語別の学習状況を考慮した言語毎の受験級・回数が担当者間で合意された。

キャリア支援

■目的

グローバル人材育成において不可欠なキャリア教育推進のために、専門家（キャリアカウンセラー）の支援を受けて、国内外でのインターンシップ体験のための準備セミナーを継続的に開催する。

対象学生は３年次とし、この課外セミナーを通して、２年次の海外体験を将来の自覚的キャリア形成に結びつけるよう指導する。あわせて個別のキャリアカウンセリングを実施し、学生へのきめ細かな対応を行う。

■実績

前期中合計７回の課外講座と個別相談（キャリアカウンセラー対応）を軸とし、夏期に短期（２日から２週間）の企業就業体験を行い、グローバル・キャリア意識の形成を図った。具体的には 4/16、5/14、5/28、6/11、6/25、7/9、と毎回２時間の講座、さらにこれと別に受講者のために、＜ワールド Job カフェ＞（社会人との対話）を 5/10、6/7、7/5 いずれも土曜日の午後に開催した。講座受講者は 110 名、毎回の job カフェは 30 人前後の参加であった。就業体験のためには、挨拶、履歴書執筆、敬語等基礎的なビジネスマナーの習得が不可欠であり、講座ではそれらについても基礎訓練を行った。また Job カフェのように社会人とテーブルを囲んで学生が話し合う機会は、通常の授業では提供しがたいものであり、ひじょうに有益であった。

これらの前期中活動を経て学生 55 名が、大学の紹介を経て、国内企業でのインターンシップを体験した（これと別に個人で公募インターンシップに参加した者もある）。

この間キャリアカウンセラーは、学生一人一人と連絡を取り、一人一回一時間前後に及ぶカウンセリングを繰り返し、漠然とした自身の将来イメージを掘り下げ、具体的な就業活動への道筋をつけた。カウンセリングは、就業体験終了後も継続し、一部学生については現在（4 年次）においても相談に応じている。

■総括

インターンシップ活動の成果を定量的に示すのはなかなか困難であるが、参加学生のアンケート結果では８割以上の学生が体験を肯定的に評価している。さらに個別事例ではあるが国際系ホテルでのインターンシップを経験した学生は、ホテルスタッフが流暢な英語で外国人客に応対していることを目の当たりにし、「英語を勉強することへのモチベーションが非常にあがった」と述べている。あるいは、証券会社でのインターンシップを体験した学生は、「デスクワークが中心だと思っていたが、訪問外交が主であり、もっと自分から積極的に発言すべきであった」と反省している。このように就業体験が教育面にも結び付く効果をもつことが明らかとなった。

総合的な形では、後期（10 月 18 日）土曜日の午後、報告会を行い、計５名の学生の全体報告と約 30 名の学生がチームを組んでポスターセッションを行った。この報告会には企業 10 社の方、また上記ワールド job カフェに参加いただいた社会人にも参加いただき、学生たちの体験を吟味、再確認できた。

このキャリア支援講座の直接的成果は、参加学生が現在まさに就職活動中ということもあり、確定的なことを述べることはできない。他方で、多くの学生がアメリカ留学から帰国したのち、このようなインターンシップ活動経験を経ることで、英語力のみではなく、キャリア意識を強化させることがグローバル人材育成のうえで重要であることは明確となった。今後、キャリア支援課ほか学内の関連部局とも協力して、さらにこの方面での活動を強化したい。

海外研修に伴う危機管理対策

■目的

平成 26 年度夏季休暇中に多文化インターンシップ、多文化フィールドスタディーを実施するにあたり、改めて学園の危機管理体制を見直し、あいまいになっていた危機対応マニュアルを整備するとともに、具体的な学生への安全指導を行うため。同時に AUAP をはじめ、各種留学プログラムの運用にも活用する。

特定の危機を想定したシミュレーション訓練を実施し、有事の際の学内対応体制を確認する。

■実績

海外での危機管理を専門とする東京海上日動リスクコンサルティング株式会社に業務を委託し、全５回（4/10、5/10、6/10、7/10、7/25）にわたり担当教員及び職員同席のもと事前協議を行った。

次の危機管理関係書類を作成した。（1）大学海外危機管理マニュアル、（2）海外危機管理ガイドライン-教員・学生共通、（3）教員向けハンドブック、（4）学生向けハンドブック

8/2 にはベトナムでの研修中に滞在ホテルで火災が発生したという状況を想定し、シミュレーションを実施した。今シミュレーションには、学長をはじめ副学長、専務理事、各担当部長などの大学執行部メンバーが多数参加したほか、国際交流課はもちろん、総務課、広報課、学生生活課などの関連部署の職員を動員して実施した。特に学生の安否確認、危機対策本部の機能、模擬記者会見訓練に重点を置くものだった。

シミュレーション実施後の 8/6 は、関係者で振り返りの協議を行い、具体的なフィードバックを受けるとともに課題を抽出。改善点を洗い出す作業を行った。

■総括

①危機管理対応マニュアルの整備により学園関係者がそれぞれの役割を認識することができ、今後のプログラム運営に携わる教職員が学生を引率し、現地で研修を行う際にも同等の基準で対応することが可能となった。また、ガイドラインは海外安全に関する基本的な心構え、具体的な安全対策、緊急時の対処方法をまとめたものであり、学生の知識及び意識を向上できるものとなった。

②シミュレーションを実施することにより、関係者の意識向上が図れた一方、様々な課題も浮き彫りになった。例）危機対策本部では、本部や各担当班のレイアウト設定の改善、情報を集約・整理・伝達する機能の改善、各担当班の相互連携など。模擬記者会見では、冒頭のステートメントと配布資料、さらに想定問答などより周到な準備が必要。スポークスパーソンのマスコミ対応力の強化など。

③今後は洗い出された課題をクリアすること、案件によっては関係者でプロジェクト化し改善を確実に図ることが求められる。同時に、当然大学関係者が主体となって対応をすることを原則としつつ、危機管理専門機関との連携を強化し、有事の際にはアドバイザー派遣していただき、具体的な助言を受けながら適切な対応を確実に進めていく体制を構築することも検討すべきと考える。

学習支援環境整備

■目的

平成 27 年４月にオープンする新食堂棟（通称 ASIA PLAZA）の３F にラーニング・コモンズが設置されるのを契機に、学内にある学習可能スペース（※）の総合的な運用について検討し、特に本学で推進しているグローバル事業に関連するテーマで、学生が自主的にかつ相互的に学習する環境と仕組みを構築するため。

※①PLAZA コモンズ、②国際交流ラウンジ（８号館・国際交流会館１F）、③ラーニング・コモンズ（図書館２F）

■実績

丸善株式会社にコンサルティングを依頼し、８回にわたり、構想責任者及びチーフディレクターをはじめ、学内の関連部署の事務職員で上記環境をいかに創造できるか具体的な検討を行った。以下、概要。

第１回・第２回　事務職員を対象に本学が取り組んでいるグローバル事業の取組内容について情報を提供。英語力（TOEIC®スコア）、キャリアがポイント。さらに本学が認識している課題について共有。

第３回　教員との意見交換。プレゼンの場としての活用や留学生との交流を希望。英語については自学習というよりもパフォーマンスを重視。空間について、そのほかのスペースとの使い分け。

第４回　他大学の事例研究（プロジェクトマネジメント講座、語学サロンなど）。学内組織が編成できるかの検討。

第５回　施設見学を兼ねて（スペース、学生の利用状況、雰囲気等）

第６回　空間活用法について協議。３つの空間の役割イメージについて意見交換

第７回　具体的な実現可能なイベント案

第８回　総括

■総括

上記の協議を踏まえ、平成 27 年度取り組むべき課題が明確になった。具体的には、

①空間の使い分け：ラウンジ、コモンズ、図書館をどう使い分けるか。その特色づけをしたうえで、学生への周知を図る。例えば、留学生と交流するにはどこへ行けばいいか。語学学習や文化交流など、目的に応じて場所が特定できるようになる仕組みづくりが可能。

②グローバルに活躍するための英語力：TOEIC®基礎力を伸ばすための仕組み（チューター制）。

グローバル・ポートフォリオシステム（manaba global）活用による指導充実化

■目的

グローバル・ポートフォリオシステム（manaba　global）を新規導入し、各学生の学習履歴等を記録し、各教員の学生指導のためのツ

ールとする。これにより、各教員が保持していたデータを共有化することが可能となり、各学生への学習指導体制が向上できる。4年一貫の学習履歴等の管理により、キャリア教育にもデータを有効利用し、就職活動の際の有効なツールとすることができる。

■実績

平成26年度前期にシステム運営会社（朝日ネット）との協議を繰り返し、どのような形での導入が可能か検討した。その結果、予算制約上、平成26年度後期に国際関係学部3年生（10月1日時点での在籍者数 322 名）を対象とし、半年間のトライアルとすること、あわせて平成27年度については既存の書き込みデータを継続利用できるという条件で導入した。10月導入とともに、学部教員向けの説明会、また対象学生に対しての一斉メールでの告知を行った。

実質的な利用は大きく3方面にわたっており、第一は TOEIC®得点管理であり、このシステムにより学生は自身の得点履歴を画面上で確認することができるようになった。第二は、就職活動状況についての一斉アンケートの実施であり、このシステムを通して、学生本人の活動状況、国内外インターンシップ経験の有無、大学（学部）による就職支援活動についての意見を聴取した（12月3日より18日にかけて実施）。第三は、個々の教員によるゼミでの活用であり、システムに課題を提出させ、教室で画面を映写して指導した。

■総括

第一に、TOEIC®得点管理については、学生個人にとっても、管理者（教員及び担当職員）にとっても、
個々の学生のスコア履歴を即座に確認できた点は指導上有益であった。また統計データをグラフとして視覚的に簡単に把握できたのも便利であった。一方で、個々の学生のデータを視覚化する仕組みは整っておらず、この点が課題と思えた。

第二に、アンケート調査については、義務化しなかったこともあって、回収は 48 名（回収率14.9%）に留まった。とはいえ、画面上（回答者にとってみれば、スマートフォン等の携帯端末）から回答できるということから、具体的な記述部分については、比較的豊富な回答を得ることができた（集計作業にもほとんど手間取っていない）。それにより、たとえば多くの学生が「ぜひ海外で働きたい」というレベルには達していないものの、「機会があれば海外で働く」ことを厭わない姿勢であることなどを確認できた。

第三の、ゼミでの活用については、期間が短かったこともあり、個別事例にとどまった。その経験では、学生たちが互いの提出課題を確認し、自らの学習の参考にするという機能は、将来的な可能性を有しているように思えた。

次年度以降については、たまたま、全学的に新規の「学生情報連絡システム（通称、亜大ポータル）」が導入されることとなったため、「manaba global」の利用はいちおう打ち切ることとした。今後 TOEIC®得点管理については、この新規システム内での運営を試みることとなる。またアンケート作業や授業での活用は、manaba course（全学で継続利用中）を使って実施することとなる。統合性という観点からは「manaba global」ほうがはるかに簡便であるが、大学のシステム全般の枠組みと関わることであり、やむを得ない面がある。しかしながら、半年間のトライアルで得た知見を、今後のグローバル人材育成教育に生かしていくこととしたい。

グローバル・ビジネスリテラシーアセスメントシステム
PDCFA インストラクター

■目的

本学では、平成23年度より株式会社ディスコと共同で開発したグローバル・ビジネスリテラシーアセスメントシステムに基づく留学生成果シートを活用し、留学者の留学前後の成長を可視化する取り組みを行ってきた。同システムは、「リーダーシップ」「コミュニケーション能力」「問題解決力」「言語適応力」「環境適応力」社会で必要とされる5つの能力を測定の指標とし、留学前後の行動特性の変化や気づき・学びを引き出す仕組みである。

平成26年度は、①留学前後の成果診断とデータの蓄積、②留学前・留学中の振り返りの促進及び学生指導、③留学後のキャリア支援の充実を目的としてグローバル・ビジネスリテラシーアセスメントシステムを紙媒体から「C-Learning」（株式会社ディスコ）システムに変更し実施した。

■実績

平成26年度は、アメリカプログラム（AUAP）、グローバルプログラム（AUGP）、交換・派遣留学生制度（AUEP）、アジア夢カレッジキャリア開発プログラム（AUCP）に参加した602名の学生を対象に下記の取り組みを行った。

1．【留学前】出発前の事前研修会において、留学前の診断を行い、結果を確認するとともに、留学中の目標設定を行い、グループワークで様々な国に留学する学生と共有する時間を設けた。

また、事前研修会終了後には「留学準備メモ」機能を使い、研修会での学びや研修会を受けて準備することを C-learning 上にメモとして記録させ、担当教員や職員がフィードバックを行った。（留学前準備メモの記録件数 1181 件）

２．【留学中】中長期のプログラムでは、留学先大学の職員と連携して中間の成果診断、振り返りの研修を行い、留学目標の再設定を行った。（留学中の研修を行うに当たっては、My Before After シートや C-Learning 機能の説明英訳版を作成し、留学先大学の担当者と打ち合わせを重ねた）また、留学中メモ機能を使い、留学先で日々体験したこと、学んだことを記録させ、担当教員や職員がフィードバックを行った。（留学中メモの記録件数：1183 件）

３．【留学後】帰国後オリエンテーションの中で留学後の成果診断を行い、留学前後の成長度合いについて確認した上で振り返りを行い、留学後の目標を再設定させた。

AUGP では、成果診断や留学中のエピソードを自分の言葉で他者に伝えるトレーニングや他者を通じて更に深く振り返りを行うグループワークを行った。また、キャリアセンターと連携し、振り返った留学でのエピソードを自分の言葉で他者に話すどのように就職活動時の履歴書・自己アピールに落とし込む時間を設け、振り返りの内容をアウトプットする研修を行った。

また、AUCP では、別途１か月間のインターンシップ担当者の評価と学生の成果診断と合わせて、他者からの評価と学生の評価にどのような差が生じたかを確認し、その原因を分析することにより、学生自身が強み・弱みを把握させ、留学及びインターンシップでの振り返りをその後のキャリア支援に活用した。

C-learning を活用して留学前後の指導を行ってきたが、上記の内容をさらに深め、学生と教職員の相

互のフィードバックを行えるよう次年度から Action T.C（株式会社ネットマン）を導入することがが決定し、国際交流課で事前研修会を担当する職員２名が PDCFA インストラクター養成講座を受講した。

■総括

【成果】

参加者全体の約 70％の学生がこのシステムを留学後まで活用し、留学前後の成果診断や目標達成のための記録を習慣づけた。

留学準備メモで出発前の準備状況を把握し、留学中メモで留学中の目標達成状況度合いを確認する指導を行えたことや、学生の振り返りを確認することで問題を未然に解決することができたことは非常に有益であった。

留学前及び留学後の 5 つの能力の伸長度合いの平均値の傾向をプログラム別に集計すると、AUGP では全ての派遣先大学において、各能力が留学後には 0.5～1 程度伸長した。留学期間が短いことで、事前に設定した目標との関連において目標を達成できたと評価する学生が多いものと分析する。AUAP でも伸長はしているが、AUGP よりもその幅は小さい。５か月間の留学期間を過ごす過程で、当初の目標よりも高い目標に自然とシフトしていき、評価が厳しくなった傾向があるものと分析する。AUCP 及び AUEP は母数が少ないこともあるが、各能力が留学後には 0.5～1 程度伸長しており、目標の達成度合いだけでなく満足度が高いことが推察される。

研修終了後には、プログラム担当者が学生の成果を確認、分析し、より学生の行動特性を引き出せるようプログラムの運営内容（インターンシップやボランティアの追加など）の改善に役立てることができた。

【今後の方向性・課題】

今後の課題としては、学生の記録に対して教職員や他の参加学生が相互フォローできるようにすることである。C-Learning の留学準備メモ、留学中メモには返信機能がなく、フォローアップはすべて担当教員または職員がメールで行っていたため、誰がどの学生に対応どのようなフォローをしているかが把握しづらい状況であった。

日々起きたことのみを記録しているだけで、深い振り返りができていないの学生も多くいた。次年度からは、研修会等で振り返りの要点を学生に指導していく必要がある。

留学プログラムの担当教員、職員によって本システムの理解にばらつきが見られたことは、次年度に向けての課題である。留学成果診断は、留学前と留学後の学生の自己評価の変化が表れた数値であるが、数値の変化から学生の気づき、エピソードを引き出す作業が必要である。（数値の増=成果ではなく、各指標の数値の増減の差があった/なかったことに対し、どのような気づき、学びを引き出せるかがポイントである）

事前研修会や帰国後オリエンテーションにて、担当者が「グローバルリテラシー」や「ビジネスリテラシー」などの各成果指標について適切な説明をし、学生に指標の意味を理解させたうえで診断をさせ、その後に気づきを引き出す振り返りの時間を一定時間設けなければ、数値だけのデータには何の意味もない。この点は、各プログラムの事前研修会、帰国後オリエンテーションで同じクオリティになるよう説明者のスキルアップや担当者同士の情報共有が必要不可欠である。

上記の課題を踏まえて、次年度からは学生同士、教員、担当職員の三者が相互にフィードバックを行えるように、「Action T.C」（株式会社ネットマン）とグローバル・ビジネスリテラシーアセスメントシステムを連動させたシステムに移行する。「Action T.C」を活用するにあたっては、研修を行う担当職員が「PDCFA インストラクター」の資格を取得し、目標の設定方法、目標を達成するための行動習慣の設定、振り返りやフィードバックの技術を学んだ。その内容を出発前の事前研修会でも反映させていく。

留学促進ツール・国際交流ラウンジの活用

■目的

新入生と在学生に対し、本学の留学プログラムを紹介し留学参加者の増加を図るため、促進グッズを作成し、平成 26 年 4 月 11 日から 5 月 17 日までの期間に国際交流ラウンジを活用して海外留学フェアを開催した。

■実績

（1）留学促進グッズの作成

◎留学促進グッズ（学生、高校生配布用）

（作成物）クリアファイル、蛍光テープ、スタイラスペン

（活用例）留学フェアの説明会、グローバル人材関連のイベント、オープンキャンパス、父母説明会等で在学生、高校生及びその父母に配布した。

◎留学促進ツール（学内設置用）

（作成物/活用例）

のぼり：通常学内に設置。学外での説明会やイベントなどでも使用した。

テーブルシール：国際交流ラウンジ内のテーブルに留学への参加を促すメッセージつきのシールを設置した。

留学促進アニメーション制作：在学生や高校生に留学を身近に感じてもらうため、本学の非公式キャラクターである『ぽかぽか♪アジアフロさん』を用いて留学促進アニメーションを制作し、学内のデジタルサイネージに掲示した。

（2）国際交流ラウンジの活用

＜海外留学フェア＞留学説明会の実施

AUAP、AUGP、AUEP や提携する外部機関の説明会を行った。AUAP では、4 月 11 日から 5 月 17 日まで「AUAP　Friday」と題して毎週金曜日の昼休みに 5 回に亘り AUAP の留学イベントを開催した。制度説明のほか、留学先大学出身の英語教員による授業・留学生活についてのプレゼンテーション等を行い、合計 204 名の学生が参加した。

AUGP では、オーストラリア、韓国、中国、ニュージーランド、マレーシア等留学先別の説明会や留学経験者によるプレゼンテーション等を 10 回行い、合計 257 名の学生が参加した。その他実施した交換留学、海外インターンシップ、海外ボランティアプログラム等の説明会を合わせて、留学フェア期間中に 566 名（前年度比 87 名増）の学生が参加した。

＜海外留学フェア＞留学ブースの設置

AUAP、AUGP 参加学生が国際交流ラウンジにてブースを設置し、留学を希望する学生からの質問や相談に対応した。また、留学先の写真集や実際に使用した教材などの参考資料も常に閲覧できるようにした。

留学生との交流の場の提供『Movie Night』（期間）

留学生支援課では、国際交流ラウンジを利用し、不定期に『Movie Night』と称した映画鑑賞会を実施した。日本、アメリカ、タイ、台湾、中国、ベトナムなど様々な国の映画を上映し、上映後に討論会を実施、食事つきのパーティー形式にするなど留学生と日本人学生の交流できる場を設け、年間延べ 124 人が参加した。映画上映会では、台湾映画の出演女優が舞台挨拶を行う回もあり大盛況であった。

■総括

①平成 26 年度留学フェア全体の参加者数は 566 名（前年比+87 名）と昨年度よりも参加者が増加し、学内での留学の機運を高めることができた。その結果、留学フェアを開催後の AUAP 登録者は 41 名増（411 名から 452 名）、AUGP では 38 名増（98 名から 136 名）と増加しており、留学説明会や先輩学生による体験談を通じて留学先に興味をもつ学生が増え、各プログラムの参加者増につながった。

②留学フェアの開催により国際交流ラウンジの知名度は広まったものの、留学説明会実施時と昼食

のタイミングが重なり、留学説明会実施スペースが限られてしまったため、スペースの確保と学生がより留学説明会に参加しやすい会場の動線づくりが今後の課題である。

③留学相談ブースについては、経験学生による細やかな留学相談対応により留学プログラムの参加者が増加するなど一定の効果を挙げた。しかし、学内での留学相談ブースの認知度はまだ低く、十分に活用できているとは言えない状況である。留学フェア期間だけでなく、年間を通じて留学相談ブースを設置し、認知度を高めていく必要があり、留学フェア実施後は AUAP のインターンシップ生が引き続きによる相談ブースを引き続き設置することとなった。

英・中・韓公式サイトからの情報発信

■目的

日本留学を検討する海外在住の者、あるいは大学進学を希望する日本に在住する外国人留学希望者に積極的に対する情報提供と、その結果による就学意欲の高い留学希望者の入学を目的として、本学の学部学科構成等の基本情報をはじめ、留学生の受け入れ、国際交流に関する現況、ニュースなどを英語、中国語、韓国語で発信した。

■実績

情報発信内容は、入学、卒業などの学事、国際

交流に関する行事紹介、留学生の受け入れなどに関して英語ニュース 54 件、中国語ニュース 53 件、韓国語ニュース 53 件のニュースを発信した。

また年度の切り替わりに伴う各基本情報のページにつき、更新を行った。

これらサイトに対する平成 26 年度のアクセスの概況は、次の通りである。

	平成 26 年度				平成 25 年度			
	ページビュー		訪問者数		ページビュー		訪問者数	
	/	/news/	/	/news/	/	/news/	/	/news/
英　語	43,851	482	35,659	347	44,253	502	35,782	363
中国語	12,922	222	10,410	178	19,634	210	15,788	168
韓国語	4,650	108	3,700	80	6,728	89	5,350	62

他言語サイトの訪問者数は、亜細亜大学全体のサイトの 1.3%に当たる。

ニュースの閲覧状況も総じて高いものと考える。

なお、言語ページ別ではないが、平成 26 年度の本学サイト全体への国外からのセッション数は 1,365,526（1,289,496）で、その内、米国が 8,825（10,379）、中国、台湾、香港の合計が 9,298（17,294）、韓国 2546（2,480）である。

■総括

①多言語でのウェブページは、昨年に比較すると、各言語ともページビュー、訪問者とも減少している。一方、内容をみると、サイト全体へのアクセスでは米国が減少しているが、英語ページの参照自体は微減である。このことから、米国以外の地域の参照者が、英語ページを参照している可能性が予想される。

②亜細亜大学の留学生の入学者数は減少しており、ウェブページの情報発信が、入学者獲得に対して即効があったとはいえない。しかし減少は中国からの留学者の減少がもっとも多く、その他の国は大きく変動していないことから、引き続き、多言語での情報発信の必要性があるものと考える。

③今後の取り組みとしては、ニュースの選択から翻訳、ウェブへのアップロードという情報掲出のフローを合理化し、効率的な情報発信を実現することが必要である。また、翻訳精度を維持することとコストをバランスさせることについても、多言語での情報発信を継続するにあたっての、課題であると認識している。

事務職員研修

■目的

グローバル人材教育に関する社会ニーズの高まりに対応して、事務職員の国際教育支援に関わる能力向上を主な目的として以下 3 種類の研修を実施した。なお、事務職員の語学力に関して TOEIC®スコア 700 点以上を有する職員数を毎年、数名ずつ計画的に増やすことを数値目標として研修を実施している。

①海外語学研修：平成 26 年 8 月 16 日～9 月 15 日

②海外視察研修:平成 26 年 10 月 27 日～11 月 4 日

③TOEIC®講座による英語研修：平成 26 年 10 月 2 日～12 月 18 日

■実績

①海外語学研修

本研修は TOEIC®スコア 500～700 点の職員を対象としている。平成 26 年度は、選抜された職員 1 名（キャリア支援課）が、サンディエゴ州立大学（アメリカ・カリフォルニア州）の英語集中コースで約 1 ヶ月の英語学習を行った。当該職員は渡航前に TOEIC®スコア 700 点以上を取得している。

②海外視察研修

本研修は、協定大学の視察を通して留学制度及び留学生活に関する理解を深める機会を提供すると共に、留学プログラムの説明業務や派遣学生向けのカウンセリング業務に資する職員の能力向上を目指している。なお、本研修は入職 10 年目以内で TOEIC®スコア 500 点以下の職員を主な対象とし、平成 26 年度は職員 2 名（①広報課、②学術情報課）をセントラル・ワシントン大学（アメリカ・ワシントン州）に派遣し約 1 週間の視察研修を行った。

③TOEIC®講座による英語研修

本研修は全職員の TOEIC®スコアの底上げを目的としている。TOEIC®の指導で実績のある専門講師による短期集中講座で、TOEIC®スコア 700 点以上を有する職員数を増やすことを目指している。平成 26 年度は 9 名の職員が参加し、10～12 月の 3 ヶ月間でレベル別に 2 クラスに分かれ 12 回の講座を受講した。内 6 名が 500 点以上のスコアを取得している。最高で 80 点のスコアアップを果たすことができた。

■総括

①海外語学研修

派遣した職員は、１ヶ月の英語集中コース及びホームステイでの生活を通して、実践的な英語力の向上を果たすことができた。また、当該職員は派遣先大学の学生支援サービスについても事例調査を行い、現地で得たノウハウを担当業務に活かしている。英語力向上、海外大学の事例調査を行える点で、研修の有効性を確認できたことから今後も継続して実施する予定である。ただし、業務多忙により希望しても実施時期の業務の都合で参加できない職員への対応の在り方が今後の課題である。

②海外視察研修

派遣した２名の職員は、本研修で現地の留学生活や事務部署の視察を行い、派遣学生の実際の留学生活やアメリカの大学の大学運営について理解を深めることができた。今後、留学プログラムのプロモーション業務や派遣学生のカウンセリング業務で、研修で得た知識の活用が期待できる。

③TOEIC®講座による英語研修

成果については実績のとおりである。今後は、英語学習に積極的でない職員に対して、いかに内発的動機付けを喚起し英語講座に参加する職員数をどう増やしていくかが課題である。

海外出張報告

多文化インターンシップ

マレーシア（8月）

●訪問先国……マレーシア
●出張期間……平成 26 年 8 月 8 日～8 月 12 日
●出 張 者……国際関係学部教授　新井敬夫
●主な目的……多文化インターンシップ学生指導および視察

●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
8 月 9 日（土）	インターンシップ先 Globetronics 社　窓口担当者	午前：同社に学生紹介、ブリーフィング後、ジョージタウン市内視察、指導。 午後：引き続き同氏と学生とともにペナン島地理の確認、および社会学習（ジョージタウン市街地、バヤンレパス自由産業区＝FIZ）、指導
8 月 10 日（日）	インターンシップ先 UBCT 社 社長	午前：同社に学生紹介、ブリーフィング後、ジョージタウン郊外視察、指導。 午後：同氏と学生とともに周辺地理、交通網の確認（ペナン州北部とバヤンレパス地区連絡）。
8 月 11 日（月）	午前：インターンシップ先 Jabil 社事務部門責任者 午後：同氏およびグローバル人材獲得部門担当者	午前：Jabil 社に出勤する学生に同行し、同社にあいさつ、インターンシップの打ち合わせ。 午後：委託内容や身分証明発行などの事務手続きに関する打ち合わせ。

●総括

インターンシップ学生の出発から初期段階までの引率指導を行った。ホテルへの入居、現地企業の担当者との顔合わせ、現地事情説明、食事や買い物場所を含む周辺地理の確認（および社会事情や歴史・地理理解の指導）、通勤手段の確認、その他の留意点の指導を行った結果、インターンシップの円滑な開始につながった。次年度以降も、引き続き、インターンシップの円滑な開始のための指導を行う。

マレーシア（9月）

●訪問先国……マレーシア
●出張期間……平成 26 年 9 月 2 日～9 月 7 日
●出 張 者……国際関係学部教授　新井敬夫
●主な目的……多文化インターンシップ学生指導および視察

●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
9 月 3 日（水）	午前：　UBCT 社 午後：バヤンレパス自由産業区およびジョージタウン市街地視察	午前：UBCT 社にてインターン学生の状況視察。意見交換。 午後：次年度のインターンシップに向けた施設視察（事前教育の資料収集）。
9 月 4 日（木）	午前：Jabil 社 午後：Globetronics 社	午前：Jabil 社にてインターン学生の状況視察。意見交換。事務処理。 午後：Globetronics 社にてインターン学生の状況視察。意見交換。
9 月 5 日（金）	ペナン開発公社（インターンシップ成果発表会）	午前：ペナン州開発公社コンベンションホールにてインターンシップ成果発表会に出席、およびスピーチ。 午後：企業関係者、州関係者、マスコミ関係者と会食と情報交換。

●総括

インターンシップの終盤、および終了後の成果発表会、帰国まで学生の指導と引率を行った。また、現地企業の担当者との意見交換も行い、同時に次年度以降の準備も行った。成功裏に初年度のペナンインターンシップを終了できたことは成果である。今後もこのような形でインターンシップを継続することが可能となった。

シンガポール（8月）

●訪問先国……シンガポール
●出張期間……平成 26 年 8 月 7 日～8 月 15 日
●出 張 者……国際交流課参事補　寺尾浩一
●主な目的……多文化インターンシップ実施に伴う学生同行、及びインターンシップ受入企業との打合せのため

●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
8 月 8 日（金）	シンガポール市内視察と生活上の注意等の確認	公共交通等を利用しつつ、市内視察を行い、買い物等で気をつけることを説明し、通勤手段を確認する。
8 月 9 日（土）	シンガポールの歴史等フィールドワーク	シンガポールの歴史に関し、博物館等を利用しながら、フィールドワークを行う。
8 月 10 日（日）	各企業への通勤シミュレーション	宿舎から各社への通勤シミュレーションを行い、公共手段の乗り継ぎ時間等詳細事項を確認する。
8 月 11 日（月）	Prestige International 社	インターンシップ学生受け入れに関する事務詳細事項（残業、疾病時、出張、事後評価方法等）確認、インターンシップ学生の大学での様子等を含め詳細を紹介、インターンシップ受け入れ企業からの要望確認
8 月 12 日（火）	Compass Holdings 社	同上
8 月 13 日（水）	Media Japan 社	同上
8 月 14 日（木）	NNA 社、Tree Island 社	同上

●総括

①シンガポールでのインターンシップ実施初年度であり、学生たちはそれなりの気概をもって乗り込んできたが、受け入れ企業担当者との面接では、緊張のあまり用意してきたことの半分も話すことができなかった、今後の事前準備のあり方を検討しなければならない。
②シンガポールは観光地としては有名だが、その歴史をある程度知っている学生は殆どいない。学生たちはシンガポールの若い世代と一緒に業務体験をするので、日本人学生は歴史をある程度理解したうえで、本インターンシップに望むべきである。これも事前研修プログラムに加えるべきであると考える。
③２年次に米国留学をしている学生が殆どで、英語で理解することに問題が無いため、市内視察等で公共の交通機関にはすぐに慣れ、インターンシップ開始時期でも問題はないだろうと思われる。

中国（8月）

多文化フィールドスタディー・AUGP・AUEP含む

●訪問先国……中国・香港
●出張期間……平成 26 年 8 月 6 日～9 月 14 日
●出 張 者……国際関係学部准教授　三橋秀彦
●主な目的……AUGP（中国）期間中の企業視察実施、多文化フィールドスタディー指導、多文化インターシップ支援、AUEP 調整

●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
8 月 6 日（水）	午後：学生宿泊先、その付近	インターンシップ期間中の生活環境に関する指導（交通機関ほか）

8 月 7 日（木）	午前：学生宿泊先付近 午後：香港－深圳	生活環境に関する指導（金融機関ほか）（South Ocean 社　担当者と） 移動
8 月 8 日（金）	終日：古河産業（深圳）	インターンシップに関する調整（対応者　午前：総経理担当者、午後：営業部長）
8 月 9 日（土）	午後：古河産業（深圳） 午後：深圳―広州	インターンシップに関する調整（対応者　営業部長） 移動
8 月 13 日（水）	午前：香港―広州 午後：北京師範大学	移動 学生指導、企業訪問準備
8 月 14 日（木）	午前：中国伝媒大学 午後：北京師範大学	企業視察（中国中央テレビ）に関する調整（対応者　同大学広告学院院長） 学生指導：アンケート作成準備
8 月 15 日（金）	午前：中国伝媒大学 午後：北京師範大学	アンケート設計諮問（対応者　「媒介」（雑誌）編集長） 学生指導：アンケート作成準備
8 月 16 日（土）	午前：北京図書大廈 午後：北京師範大学	資料収集 学生指導：アンケート作成準備
8 月 17 日（日）	午前：抗日戦争記念館 午後：頤和園	視察 視察
8 月 18 日（月）	午後：長冨宮飯店	企業視察（対応者　同飯店総支配人ほか）
8 月 19 日（火）	午前：中国中央テレビ 午後：北京師範大学	企業視察準備（参観者名簿提出、スケジュール調整）（対応者　「媒介」（雑誌）総監） 学生指導：アンケート作成準備
8 月 20 日（水）	午後：セブンイレブン（北京）	企業視察（対応者　同社商品本部非日配商品部部長）
8 月 21 日（木）	午後：中国中央テレビ	企業視察（対応者　同テレビ総合コントロール部主任）
8 月 22 日（金）	午後：ダイキン（中国）	企業視察（対応者　日中平和観光北京代表）（ダイキン側　解説者）
8 月 23 日（土）	午前：中国伝媒大学 午後：北京師範大学	アンケート票最終確認（対応者　同大元学長） 学生指導：アンケート作成準備
8 月 24 日（日）	午前：中国国家博物館 午後：景山公園	視察 視察
8 月 25 日（月）	終日：北京師範大学	アンケート調査
8 月 26 日（火）	午前：北海公園 午前：王府井	アンケート調査 アンケート調査
8 月 27 日（水）	終日：北京師範大学	アンケート調査
8 月 28 日（木）	午前：北京大学 午後：天宇小商品城	アンケート調査 多文化マーケット備品購入
8 月 29 日（金）	午前：北京師範大学 午後：中国人民大学	アンケート調査 次年度フィールドスタディー協力依頼（対応者　同大学心理学科教授）
8 月 30 日（土）	午後：中国伝媒大学	次年度フィールドスタディー調整（対応者　同大広告学院院長）
8 月 31 日（日）	午前：北京－深圳	移動
9 月 1 日（月）	午前：古河産業（香港）深圳事務所	インターンシップ挨拶（次年度　調整）（対応者　同社営業部長）
9 月 2 日（火）	午後：深圳テクノセンター	インターンシップ挨拶（次年度　調整）（対応者　同センター総務部長）
9 月 7 日（日）	深圳－上海	移動
9 月 10 日（水）	午前：マイツ上海	インターンシップ依頼・調整（対応者　同社副総経理）
9 月 11 日（木）	午前：華東師範大学	フィールドスタディー協力依頼（同大学社会発展学院副院長）

※8 月 10 日～12 日ならびに 9 月 3 日～6 日、9 月 8 日～9 日、9 月 12 日～13 日は個人研究。

●総括

今回の出張では、AUGP（中国）における企業視察、多文化フィールドスタディー・同インターンシップ支援、AUEP 期間中のインターンシップ開設準備の 4 つの目的があった。以下、項目別に記載する。

①AUGP（中国）期間中の企業視察として、来年度は長富宮飯店（ホテル）、セブンイレブン（北京）（小売業）、ダイキン（中国）（メーカー）と、日系として中国で成功しかつ就職先として学生の関心の高い業界のリーディングカンパニーを訪ね、視察の機会を利用し学生達は担当者にインタビューを実施した。また多文化フィールドスタディーの今年度の調査テーマが「中国におけるインターネット消費」であることから、中国の消費者研究におけるメディアの影響度の大きさを理解させるために中国中央テレビを訪問した（北京）。

②多文化フィールドスタディーでは、アンケート調査にあたり中国伝媒大学関係者、「媒介」（雑誌）など中国の市場調査の専門家のアドバイスを受けながらアンケート票を設計し、完成後、学生達の手でアンケート調査を実施した（北京）。

③多文化インターンシップは初年度ということもあり、受け入れ機関（South Ocean,古河産業（香港）、深圳テクノセンター）と慎重に準備を進めた。具体的にはインターンシップの開始時、もしくは終了時に直接受け入れ担当者を訪ね、インターンシップの内容、次年度に向けた課題等について検討を行った（香港、深圳）。

④AUEP 期間中におけるインターンシップの調整（上海）具体的には日系の会計事務所であるマイツ（上海）を訪問し、平成 27 年 2 月および 7 月の計 2 回の AUEP 生の受け入れに関する調整を行った。

以上が今回の出張の主たる内容である。成果としては初年度の作業としては上記 4 事業の基本形がすべて整ったという意味で所期の成果は十分に達成された。課題として残ったのは、調査、研修地点が北京、上海、深圳、香港と中国各地に広がったため、それぞれの研修の時期に合わせて担当者が移動しつつ調整を重ねるといった慌ただしく、かつ大変なエネルギーを要する作業スタイルとなった点である。

韓国（9月）

AUGP含む

●訪問先国……韓国
●出張期間……平成 26 年 9 月 1 日～9 月 6 日
●出 張 者……アジア研究所教授　奥田聡、
国際交流課主事補　矢吹知大
●主な目的……多文化インターンシップ実習視察及び次年度以降の受け入れ交渉のため
AUGP 研修視察及び慶熙大学校教員との意見交換のため

●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
9 月 2 日（火）	ソウル市内生活環境調査	宿舎付近の環境調査等
9 月 3 日（水）	対外経済政策研究院（KIEP）日本チーム長	インターンシップ視察、次年度以降の受け入れ交渉
9 月 4 日（木）	日本貿易振興機構（JETRO）ソウル事務所　副所長、調査チーム課長、総務チーム長	同上
9 月 5 日（金）	慶熙大学校　国際教育院長、客員教授	AUGP 研修視察、教員との意見交換

●総括

①対外経済政策研究院では、学生 1 名が実習を行った。視察時は、実習課題として提示された市場ニーズ調査の結果に基づき、「韓国におけるスマートフォンの普及について」を主題とするプレゼンテーションが行われた。韓国語を用いたアンケート調査を学生が積極的に行い、自身の考察も含めたプレゼンテーションは高い評価を得た。

対外経済政策研究院は平成26年秋に世宗市への移転を控えており、次年度以降の受け入れは移転後の状況によるところが大きいとの見通しが示されたが、実習を希望する学生がいれば受け入れに向けて調整いきたいとの意向が示された。
②日本貿易振興機構ソウル事務所では、学生２名が実習を行った。対外経済政策研究院と同様、化粧品及びファッションに関するプレゼンテーションが行われた。事務所職員からは内容の評価すべき点、新たな着眼点に関する助言等、フィードバックがあった。
今年度は韓国の秋夕（旧盆のような連休）が９月７日（日）からであり、実習期間を長期間確保することが難しい状況であった。次年度以降は実習期間の長短も考慮し、実習内容や指導方法に関する事前打ち合わせを密にすることが望ましいと考える。
③慶熙大学校では、初級及び中級の授業を１つずつ見学した。教員からの質問や課題に即座に正確な回答をするなど、本学学生の研修の成果が出ていることが確認できた。
教員との意見交換では、主に本学が独自に実施している企業訪問について意見を交換した。今年度はサムスン電子のグローバル広報施設及び自治体事務所を訪問する計画であり、企業訪問を実施する目的について再度意見の一致に至った。

インド・シンガポール（9月）
多文化フィールドスタディー、多文化インターンシップなど

●**訪問先国**……インド、シンガポール
●**出張期間**……平成26年９月７日～９月17日
●**出 張 者**……国際関係学部特任教授　九門崇、国際交流課参事補　寺尾浩一
●**主な目的**……インド：インターンシップ受け入れ先開拓、学術文化交流協定締結先大学訪問
シンガポール：インターンシップ学生受け入れ企業訪問及び学生研修状況確認

●**行動日程（現地）**

日時	訪問先・対応者等	概要
９月８日（月）	JETRO バンガロール	バンガロール事情のブリーフィング バンガロール日系企業における日本人学生のインターンシップ受け入れ事情のブリーフィング
９月８日（月）	UNO-IN The Chancery	研修内容等のブリーフィング及び打ち合わせ インターンシップ生の受け入れ可否確認
９月８日（月）	JETRO チェンナイ	チェンナイ事情のブリーフィング チェンナイ日系企業における日本人学生のインターンシップ受け入れ事情のブリーフィング
９月８日（月）	Madras University	学術文化交流協定締結に向けたスケジュール等具体的内容の打ち合わせ
９月９日（火）	チェンナイ→シンガポール（寺尾参事補） チェンナイ→成田（九門特任教授）	移動
９月10日（水）	Prestige International 社	インターンシップ生の研修中行動・成果確認 来年度に向けた改善点等の確認
９月８日（月）	Compass Holdings 社	同上
９月９日（火）	Media Japan 社	同上
９月10日（水）	Tree Island 社	同上

●**総括**
①インターンシップの受け入れに関して、バンガロールでは、数はまだまだ少ないものの、日本の大学生が個人でインターンシップを実施しており、本学の学生が実施することも可能である、しかしながら、ホテル等では長期間（最低６ヶ月）のインターンシップを希望しており、大学のカリキュラムを考慮しなければならない。
②シンガポールでは、初年度だったにもかかわらず、学生たちに対する企業担当者の評価は高かった。また、学生たちの成長度合いを高めるための指摘も的確で、帰国後に確りとフィードバックしたい。
③新規協定校開発（マドラス大学）に関しては、可能性はあるものの、様々な人間関係を駆使して、

今後も継続的にコンタクトを取らなければならないと考える。

マレーシア・シンガポール（3月）
新規協定大学開拓・多文化インターンシップ

●訪問先国……マレーシア・シンガポール
●出張期間……平成 27 年 3 月 2 日～3 月 7 日
●出 張 者……国際関係学部講師　太田瑞希子
国際交流課参事補　寺尾浩一
●主な目的……マレーシア UCSI 大学訪問及びシンガポールインターンシップ受入企業訪問の為

●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
3 月 3 日（火）	UCSI 大学訪問	外国人留学生向け英語授業見学 寮見学 英語授業カリキュラムの説明を受け、AUAP 型留学プログラム実施可能性について協議 学内就業体験場所の視察
3 月 4 日（水）	インターンシップ受入企業訪問 紀伊国屋書店（新規）	学生受け入れ経緯とその内容説明を受け、本学が目指すインターンシップ内容との差異調整のための協議
3 月 5 日（木）	クアラルンプール発 シンガポール着 インターンシップ受け入れ企業 紀伊国屋書店（新規）	同上
3 月 6 日（金）	Prestige International 社 Compass Holdings 社 Media Japan 社	今年度夏季多文化インターンシップ受け入れ企業での学生の様子をヒアリング

●総括
①マレーシア、シンガポールのインターンシップ受け入れ企業（新規）では、受け入れスケジュール、期間、内容ともフィックスされており、本学が実施しているプログラム内容での展開はほぼ不可能であると思う。
②シンガポールでの受け入れ実績のある企業でのヒアリングでは、企業側の学生指導の手厚さに圧倒された。インターンシップ自体に対する企業側の考え方が、欧米企業並みだと感じた。
③UCSI 訪問では、AUAP 型プログラムの実施可能性は十分あり、今後詳細をつめる必要がある。

韓国（3月）

●訪問先国……韓国
●出張期間……平成 27 年 3 月 22 日～3 月 28 日
●出 張 者……アジア研究所教授　奥田聡、
国際交流課主事補　矢吹知大
●主な目的……多文化インターンシップ次年度の受け入れ交渉及び実習先移転先の環境の視察のため

●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
3 月 23 日（月）	日本貿易振興機構（JETRO）ソウル事務所　所長、調査チーム課長	次年度以降の受け入れ交渉
3 月 24 日（火）	午前：移動（大田市） 午後：大田市生活環境調査	宿舎候補先①及び宿舎近隣･最寄り駅の環境確認
3 月 25 日（水）	世宗市生活環境調査	通勤経路、世宗市の交通事情、宿舎候補先の環境確認

3 月 26 日（木）	対外経済政策研究院（KIEP）国際巨視金融室長、日本チーム長	次年度以降の受け入れ交渉
3 月 27 日（金）	午前：大田市生活環境調査 午後：ソウルへ移動	宿舎候補先②及び宿舎近隣の環境確認

●総括

①日本貿易振興機構ソウル事務所では、平成 27 年度の韓国での実習を希望している学生数に基づき、8 月中旬から 2 週間、2 名の受け入れを依頼し、合意に至った。基本的には実習内容や職員から学生への指導方法は、平成 26 年度の方式を踏襲することとし、実習の正式日程や使用可能備品等の条件は、今後東京の本部も交えて協議することとした。

②対外経済政策研究院は当初の予定通り、平成 26 年秋にソウルから世宗市に移転が完了し、本学関係者の世宗市への初の訪問となった。世宗市はまだ開発途上であり、工事関係車両の姿が目立ち、今後の発展が期待される。本学学生の平成 27 年度の受け入れは、希望している学生数に基づき、8 月中旬から 2 週間、1 名の受け入れを依頼した。平成 26 年度と同様に、日本チームを中心とした受け入れを行うことで合意したが、協定書の締結等の提案が対外経済政策研究院側から提議され、引き続き協議することとした。

③世宗市には、学生が滞在するに適した宿舎がまだ存在しないため、比較的近郊の大田広域市から通勤する案を事前に作成し、候補宿舎に実際に宿泊することでの環境調査、想定通勤ルートでの通勤シミュレーションを実施した。宿舎は学生の金銭的負担、セキュリティ面を重視した。候補宿舎はビジネスホテルであり、1 泊 4 万ウォンで宿泊が可能であった。各階の廊下に監視カメラが備えられており、客室内にはチェーンキーやセーフティーボックスが備えられているなど、要件を満たしていると判断できた。世宗市への通勤は、宿舎から大田地下鉄の最寄り駅まで徒歩約 10 分、地下鉄乗車時間が約 20 分、バスの乗車時間が約 30 分と、乗り継ぎ時間も含めて 1 時間強で通勤できることが明らかになった。宿舎から最寄り駅までは大通りを通るため、深夜でなければ人通りが絶えることはない。バスの路線も交通量が少なく、交通事故のリスクは低いと評価した。学生には本視察で撮影した写真を添えて通勤方法を指示し、安全に実習が行える体制を整えることとした。

香港・上海（3月）
多文化インターンシップ、AUEP

●訪問先国……中国　香港・上海
●出張期間……平成 27 年 3 月 22 日～3 月 29 日
●出 張 者……国際関係学部教授　新井敬夫、
国際関係学部准教授　三橋秀彦
●主な目的……多文化インターンシップ新規開拓（香港、中国（上海）、AUEP（中国上海）に関する諸調整

●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
3 月 22 日（日）	午後：South Ocean Group	インターンシップに関する協議
3 月 23 日（月）	WKK（王氏港建科技有限公司）Executive Director、General Manager ほか	同社におけるインターンシップ受け入れに関する協議および本社・東莞工場視察
3 月 24 日（火）	移動等	新井　帰国 三橋　上海研修資料作成（含むインターンシップ）
3 月 25 日（水）	午前：移動 午後：華東師範大学関行校舎	香港-上海 AUEP 派遣留学生の学習環境視察
3 月 26 日（木）	午前：工場網信息諮詢（上海）有限公司　副総経理 午後：マイツ上海　事業開発部	インターンシップに関する依頼・調整
3 月 27 日（金）	華東師範大学社会発展学院　副院長	AUEP 生の学習に関する協議、依頼
3 月 28 日（土）	極楽湯（上海）沐浴有限公司　営業部副部長	インターンシップ環境視察

●総括

（１）インターンシップ（５社）

・South Ocean Group（南洋針織集団）；2014 年に引き続き、2015 年度も学生２名の研修を受け入れて頂けることになった。

・ＷＫＫ（王氏港建科技有限公司）；同社幹部同伴のもと本社、研修先施設等研修環境を視察した。協議の結果、2015 年８月 31 日から９月 11 日の期間、学生２名を同社の東莞工場で受け入て頂けることになった。

・工場網信息諮詢（上海）有限公司；９月８-11 日の期間中、同社が主催する「ＦＢＣ上海日中ものづくり商談会」での業務補助を通し商談に接することで中国ビジネスの現場を経験することになった。

・マイツ上海；７月 13 日から８月 10 日まで AUEP 生として華東師範大学で学ぶ学生の２度目のインターンシップを引き受けて頂けることになった。

・極楽湯（上海）；今回は具体的調整には至らなかったが、中国における日本式サービスの学ぶ場として視察し、インターンシップ、採用を含めた今後の協力可能性を依頼し、理解を得た。

（２）ＡＵＥＰ派遣学生の学習環境視察

中国に派遣するＡＵＥＰ生としては初めて中国語学習研修機関ではなく、学部で専門教育を受けている学生の学習環境を視察し、受け入れ責任者である張文明社会発展学院副院長から当該学生の学習状況についてヒアリングを実施した。

極楽湯（金沙江路店）の店長兼営業部副部長と同店勤務の本学卒業生

多文化フィールドスタディー

ベトナム（8月）

●出 張 者……国際関係学部講師　大塚直樹
●主な目的……多文化フィールドスタディーの引率（学生 7 名）および新規調査地の開拓

●訪問先国……ベトナム（ホイアン）
●出張期間……平成 26 年 8 月 17 日～8 月 24 日
●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
8 月 17 日（日）	午後：ホイアン世界遺産区	引率学生と街並みの確認・ミーティング
8 月 18 日（月）	ホイアン世界遺産区	景観観察博物館・資料館の見学ミーティング
8 月 19 日（火）	ホイアン世界遺産区	土地利用調査（店舗調査） インタビュー調査（観光客・現地の人） ミーティング
8 月 20 日（水）	ホイアン世界遺産区	インタビュー調査（観光客・現地の人） ミーティング
8 月 21 日（木）	ホイアン世界遺産区	インタビュー調査（観光客・現地の人） ミーティング
8 月 22 日（金）	午前：海岸リゾート 午後：　ホイアン世界遺産区	インタビュー調査（観光客） インタビュー調査（観光客・現地の人） ミーティング
8 月 23 日（土）	ホイアン世界遺産区	補足調査

●総括

今回、初めて学生を引率してホイアンに滞在し、フィールド調査を実施した。最大の成果は、異国の地でのインタビュー調査を通じて、参加学生が現場適応性や積極性を身につけられたと実感できたことである。すべての学生が初めてのベトナム滞在（初めての熱帯地域）という中、グループに分かれて景観調査やインタビュー調査をする様子は、こちらの想像以上にたくましさがみられた。インタビュー調査自体は、約 100 名から回答を得ており、こちらも教員側の予想を上回る数字であった。また、毎晩ミーティングを行い、その日の調査成果や問題点を全員で共有することで、翌日の課題を発見することができた。

調査結果については、帰国後に成果報告会にてグループ発表したと同時に、現在、成果報告書も作成中である。

今度の課題としては、まず、フィールド調査の中で得られたデータをより精緻化してゆく作業が必要となってくる点があげられる。異国の地で、非母語で実施するインタビュー調査の中で、インフォーマントから得られた情報を、どのようにして裏付けるか、その方法論や調査者としてのモラルの向上が求められる。次に、体調管理である。やはり熱帯の気候の中で屋外調査を実施することは、肉体的にも、精神的にもさまざまな制約がある。効果的に休憩をとりつつ、いかに効率的に調査を実施できるかが今後重要となろう。

韓国（8月）

●訪問先国……韓国
●出張期間……平成 26 年 8 月 17 日～8 月 27 日
●出 張 者……国際関係学部教授　金柄徹
●主な目的……多文化フィールドスタディー（韓国）の実施に伴う、ソウルでの指導及び釜山での現地調査のため

●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
8 月 18 日（月）	民俗博物館・景福宮・仁寺洞・明洞など	見学
8 月 19 日（火）	明洞・清渓川・新村・梨花女子大学など	アンケート調査実施

8 月 20 日（水）	明洞・清渓川・新村・梨花女子大学など	アンケート調査実施
8 月 21 日（木）	板門店（JSA）	見学
8 月 22 日（金）	博物館・美術館・大学街・映画館など	自主見学・調査活動
8 月 23 日（土）	学生：金浦→羽田	移動
8 月 24 日（日）	ソウル→釜山	移動
8 月 25 日（月）	東西大学校（交換留学新規協定候補大学）周辺・西面・チャガルチ市場・国際市場	フィールドワーク候補地調査
8 月 26 日（火）	東西大学校（交換留学新規協定候補大学）周辺・西面・チャガルチ市場・国際市場	フィールドワーク候補地調査

●総括

明洞でのアンケート調査

新村でのアンケート調査

JSA 見学

①学習成果
11 人の学生と韓国を訪れ、王宮・博物館・JSA（板門店）などを見学し、数々の韓国の食文化を体験できた。そして、ソウルの繁華街や大学街で、メイン課題であるアンケート調査を行った。設問紙は日本での授業で各自が作成したもので、そのテーマは、家族観、勉学、アルバイト事情、恋愛と結婚、音楽、ファッション、食文化など、多岐にわたった。異国の地での調査はかなりハードな作業で、勇気を出して声をかけても相手に断られたり、無視されたりすると、挫けて落ち込んでしまう場合もあった。だが、このような失敗と挫折があってこそ、それを乗り越える術を知ることができるもので、仲間同士で励ましながらもう一度チャレンジし、韓国語が通じなければ、英語やジェスチャーなどで懸命にコミュニケーションをとっていた。時には、別の話題にまで話が盛り上がり、同じく「若者だから」通じるものは多いと感じられた。現場でしか得ることのできない、これらの経験は皆にとって貴重な財産になっていくと思われる。
②今後の課題
調査地としてソウルを選定しているが、将来的には、釜山や済州島などでも実施できればと思う。また、滞在中に 2～3 日でも、同年代の韓国の若者の家にホームステイすることも今後の目標としているので、現地の大学関係者と調整していくことにしたい。

フィリピン(9月)

●訪問先国……フィリピン
●出張期間……平成 26 年 9 月 4 日～9 月 18 日
●出 張 者……国際関係学部講師　小張 順弘
●主な目的……多文化フィールドワーク（フィリピン）プログラム実施

●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
9 月 5 日（金）	サンカルロス大学 学長補佐 歴史学担当 言語学担当 合同フィールドワーク（セブ市内）	現地提携大学での特別講義（1 日目） （1）「フィリピン共和国、セブの背景」 （2）「フィリピンの歴史」 （3）「セブアノ語基礎」 現地大学生とのグループ調査（1 日目）
9 月 6 日（土）	サンカルロス大学 国際関係学担当 言語学担当 合同フィールドワーク（セブ市内）	現地大学での特別講義（2 日目） （1）「アジア太平洋地域での日比国際関係」 （2）「セブアノ語基礎」 現地大学生とのグループ調査（2 日目）
9 月 7 日（日）	合同フィールドワーク（セブ市内）	現地大学生とのグループ調査（3 日目）
9 月 8 日（月）	大学特別講義 政治学担当 言語学担当 経済学担当	現地大学での特別講義（3 日目） （1）「フィリピンの政治制度」 （2）「セブアノ語基礎」 （3）「日比経済関係」
9 月 9 日（火）	フィールドワーク発表準備 発表会＆お別れ会	現地大学生とのグループ調査準備及び発表 現地大学生との夕食会
9 月 10 日（水）	日系企業訪問 Cebu Dental　現地社長 Alay Kapwa Cebu（NGO）訪問 General Secretary	歯科技工会社訪問及び日比間での経済動向 NGO メンバー宅へのホームステイ
9 月 11 日（木）	NGO ホームステイ NGO 活動地域視察 Fancy Co., Ltd., Factory Manager	地域生活の観察、ホームステイ総括 日系企業見学（ウェディングドレス製造）
9 月 12 日（金）	移動（セブ島→ボホール島） 島内視察 AYA-CCA Marine リゾート プロジェクトマネージャー	チョコレートヒルズ視察 リゾート開発担当者からのブリーフィング
9 月 13 日（土）	パングラオ町役場訪問 町長 開発現場視察、ロボック川視察 移動（ボホール島→セブ島）	パングラオ島リゾート開発現場視察 自然保全と観光開発 高速フェリー
9 月 14 日（日）	マクタン島視察 移動（セブ島→マニラ）	史跡、市場見学など
9 月 15 日（月）	Alay Kapwa Educational Foundation 訪問 Project Coordinator 日本経済新聞マニラ支局長	都市貧困地域自立支援のキリスト教系 NGO 訪問（活 動現場視察） 日比経済関係についての最近の動向についてのブリ ーフィング
9 月 16 日（火）	市内視察 マニラ地区視察（イントラムロスなど） マカティ地区視察	国立博物館、史跡視察 アヤラ博物館、商業地区視察

9 月 17 日（水）	パサイ地区視察 ブリーフ フィールドスタディー総括ミーティング	埋め立て開発地区視察 フィリピン残留日系人支援 NGO 団体の活動 全日程の振り返り

●総括

プログラム全体としては、大きな問題もなく順調に日程を終え、無事に終了することができた。また、限られた時間ではあったが、参加学生たちは「旅行者」「観光者」として現地を訪問しているという意識ではなく、「学習者」という姿勢を持つことで意味のある現地体験を得ることができた。個別の興味を抱く中、現地社会の諸相に触れて感じることは様々であり、頻繁に行われた参加学生たちの意見交換での気づきなども、互いに影響を与えていたように感じられた。また、現地での同世代（提携先の大学生）との合同調査などを実施することで、自然と交流が深まり、何気ない会話の中からも現地社会・文化への理解や日本とのつながりを考えるきっかけになったようである。「講義」「訪問」「観察」「体験」「交流」などが日々繰り返される日程の中、怪我・病気・事故もなく現地関係者の協力を得ながら予定のプログラムを実施することができた。以下、今回の実施で浮かび上がった今後の課題点を挙げる。

＜出入国に関して＞

現地入りする際、成田発マニラ行の搭乗予定便が 4 時間遅れ、予定していた国内での乗継便（マニラ発セブ行）の時間が間に合わないことが判明したために、航空会社に連絡をして国内線変更の手配を行った。同日、香港でのインターンシップを終えた学生 1 名がマニラ入りを予定しており、マニラの空港で合流してセブへ向かう予定だったため、予定の変更の連絡をメールで行い、変更後の指示をおこなった。香港でのインターンシップ日程との関係や学生の国際線航空運賃負担分の軽減という観点から今回はマニラでの合流とする予定としたが、フライトの遅延・キャンセルなどが発生した場合には合流ができなくなる恐れが認められ、危機管理の点から取り残される学生への対応が課題として明らかになった。今回は連絡手段を確保していたために大きな問題とはならなかったが、今後のプログラム実施の際には危機管理という観点から参加学生の海外での不測の事態への対応力という資質を検討した上で現地合流の可否を検討する必要があることが浮かび上がった。

＜現地プログラムについて＞

現地大学生との合同フィールドワークは、参加学生たちから好評であった。また、ホームステイも観光では見ることのできない現地での生活に触れる良い機会であったとの感想が多くあった。今後の実施にあたっては、現地でのプログラム内容・実施日数・経費などを総合的に再検討し、学生が現地での安全を確保するために自己管理を行いつつ、主体的に行動ができる機会の確保を検討していきたい。

＜参加費用について＞

今回のプログラム実施中（9 月初旬～中旬）に、急激な円安の影響を受けた結果、当初予定していた見積額よりも 1 ～ 2 割の参加費増という結果となった。参加費用については多少の余裕を見ての概算を行ったものの、次回からはさらに余裕を持った概算を示す必要性、また為替レートの急激な変動の影響を受ける可能性があるとの事前説明を行う必要性があると認められた。

アジア夢カレッジ－キャリア開発中国プログラム－

現地受入関連

●訪問先国……中国・大連
●出張期間……平成 26 年 6 月 8 日～6 月 13 日
●出 張 者……アジア研究所教授　西澤正樹、
国際交流課参事補　寺尾浩一
●主な目的……インターンシップ受け入れに関する詳細打合せ及びオムニバス講義「中国の仕事と生活」講師依頼、大連外国語大学との学生の受け入れに関する打合せ

●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
6 月 9 日（月）	大連松下汽車電子系統有限公司 東芝大連有限公司 YKK　大連吉田拉鏈有限公司 富士電機大連有限公司 大連三島食品有限公司	インターンシップ受け入れに関する詳細打合せ オムニバス講義「中国の仕事と生活」講師依頼
6 月 10 日（火）	日本貿易振興機構大連事務所 德勤華永会計師事務所有限公司 大連分所 在瀋陽日本国総領事館在大連出張駐在官事務所 日本瑞穂実業銀行股份有限公司 大連分行 日本法円坂律師事務所 大連代表処 大連泰和信息技術有限公司 大連漫歩広告有限公司	インターンシップ受け入れに関する詳細打合せ オムニバス講義「中国の仕事と生活」講師依頼
6 月 11 日（水）	TOMBO　蜻蜓文具商貿（大連）有限公司 大連中国国際旅行社有限公司 大連慧搜网技術有限公司 全日本空輸株式会社 瀋陽・大連支店 ホームクリニック大連	インターンシップ受け入れに関する詳細打合せ オムニバス講義「中国の仕事と生活」講師依頼
6 月 12 日（木）	午前： 大連愛光浸漬成型有限公司 嘉時泰国際物流（大連）有限公司 大連市経済技術開発区招商中心招商一局一部 午後： 米克罗弹簧（大连）有限公司	インターンシップ受け入れに関する詳細打合せ オムニバス講義「中国の仕事と生活」講師依頼

●総括

①インターンシップの受け入れ、オムニバス講義「中国の仕事と生活」への講師依頼もこちらの希望どおりであった。

②インターンシップ期間中の通勤経理に関する受け入れ企業からの心配が多かった。今後の検討項目である。

オリエンテーション及びキャリア指導など

●訪問先国……中国・大連
●出張期間……平成 26 年 8 月 25 日～9 月 6 日
●出 張 者……アジア研究所教授　西澤正樹、
国際関係学部特任教授　九門　崇、
国際交流課参事補　寺尾浩一
●主な目的……夢カレ 10 期生（14 名）を引率し、大連外国語大学にてオリエンテーション及びキャリア指導を行うほか、インターンシップ派遣予定企業との打合せを行うため

●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
8 月 26 日（火）	全日本空輸株式会社 瀋陽・大連支店 日本貿易振興機構大連事務所 大連晴康国際貿易有限公司 みずほ銀行（中国）大連支店	インターンシップ学生と受け入れ企業担当者との打合せ オムニバス講義「中国の仕事と生活」詳細事項確認
8 月 27 日（水）	大連外国語大学 夢カレ 10 期生　オリエンテーションとキャリア研修	留学生活全般の注意事項等再確認 インターンシップ面接に際しての注意事項等確認
8 月 28 日（木）	德勤華永会計師事務所有限公司 大連分所、在瀋陽日本国総領事館領事事務所、駐大連北九州市経済事務所、北京大成（大連）律師事務所、日本法円坂律師事務所 大連代表処、大連中国国際旅行社有限公司、大連泰和信息技術有限公司、大連漫歩広告有限公司	インターンシップ学生と受け入れ企業担当者との打合せ オムニバス講義「中国の仕事と生活」詳細事項確認
8 月 29 日（金）	大連愛光浸漬成型有限公司、大連市経済技術開発区招商中心招商一局一部、嘉時泰国際物流（大連）有限公司、大連三島食品有限公司 富士電機大連有限公司	インターンシップ学生と受け入れ企業担当者との打合せ オムニバス講義「中国の仕事と生活」詳細事項確認
8 月 30 日（土）	大連外国語大学漢学院と打合せ	大連外国語大学への夢カレ生派遣 10 周年及び大連外国語大学創立 50 周年記念式典及び祝賀会準備のための打合せ
8 月 31 日（日）	グローバルキャリアプログラム（旅順地域視察・歴史講義）	旅順地域の歴史等の講義を受講し、そのフィールド調査を行う
9 月 1 日（月）	大連東芝有限公司 米克罗弾簧（大连）有限公司 大連松下汽車電子系統有限公司 YKK　大連吉田拉鏈有限公司	インターンシップ学生と受け入れ企業担当者との打合せ オムニバス講義「中国の仕事と生活」詳細事項確認
9 月 2 日（火）	TOMBO　蜻蜓文具商貿（大連）有限公司 大連慧搜网技術有限公司	インターンシップ学生と受け入れ企業担当者との打合せ オムニバス講義「中国の仕事と生活」詳細事項確認
9 月 3 日（水）	グローバル・ビジネスアセスメントシステム説明会	インターンシップ受け入れ企業担当者に左記システムの詳細を説明し、より正確な評価を依頼
9 月 4 日（木）	今村美容美髪 大連外国語大学への夢カレ生派遣 10 周年及び大連外国語大学創立 50 周年記念式典及び祝賀会準備	インターンシップ学生と受け入れ企業担当者との打合せ オムニバス講義「中国の仕事と生活」詳細事項確認 左記式典準備

9 月 5 日（金）	大連外国語大学への夢カレ生派遣 10 周年及び大連外国語大学創立 50 周年記念式典及び祝賀会開催	左記式典実施

●総括

①インターンシップ受け入れ企業における学生面接では、学生が緊張しすぎてしまった。学生への事前指導の課題である。
②大連外国語大学への夢カレ生派遣 10 周年及び大連外国語大学創立 50 周年記念式典及び祝賀会の開催に関して、多くの在瀋陽日本国総領事館在大連領事事務所長はじめ、多くの日系企業の参加があり、本プログラムの 10 年間の展開を確認し、今後の展望が開けたことが有意義なことであった。

キャリア研修等

●訪問先国……中国・大連
●出張期間……平成 26 年 11 月 4 日～11 月 7 日
●出 張 者……国際関係学部特任教授　九門　崇、国際交流課参事補　寺尾浩一
●主な目的……夢カレ 10 期生に対しキャリア研修を実施するとともにインターンシップ受入先企業と研修内容やスケジュールについて調整を行うため

●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
11 月 5 日（水）	午前： キャリア研修準備（九門） 午後： キャリア研修実施（九門・寺尾）	中国人学生との合同キャリア研修第二回目の実施 （将来の方向性を見出すためのアカデミックな手法を紹介し、各人が実際に検証してみる。また、その結果を発表し合い、情報共有する。）
11 月 6 日（木）	大連泰殿有限公司（寺尾） 大連国際空港発（九門）	インターンシップ受け入れ予定企業から受け入れ時期変更依頼があり、その実情ヒアリングと対応策の提示のため。

●総括

①インターンシップ受け入れに関しては、それぞれの企業の事情があり、その事情に合わせなければならない。本プログラム開始直後であれば、相当苦労したと思うが、これまでの蓄積もあり、企業側も当方の提案を受け入れてくれた。
②キャリア開発研修での日中双方の学生発表は大変興味深い。中国人学生のプレゼン能力の高さに、驚かされた。自分の意見を堂々と発表できる姿勢は、日本人学生にも学んでもらいたい。

調査指導など

●訪問先国……中国・大連
●出張期間……平成 26 年 11 月 11 日～11 月 15 日
●出 張 者……国際関係学部准教授　三橋秀彦
●主な目的……AUCP 期間中の中国語学習および調査指導

●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
11 月 11 日（火）	大連外国語大学	学生面談
11 月 12 日（水）	大連外国語大学	学生面談
11 月 13 日（木）	大連外国語大学	学生の学習状況に関するヒアリング （対応者：同大漢学院院長） 学生面談
11 月 14 日（金）	大連外国語大学	学生面談

●総括

今回の出張は、例年実施している AUCP 期間中の学生面談が主たる目的であった。面談内容は、以下の 3 点を中心に一人当たり 30 分を単位として実施した。結果的に少ない学生で 2 回、多い学生で 4 回の面談を実施した。

（1）中国語学習に関する内容
この部分については日頃の大連外国語大学の中国語教育の一環として現地で高度の教育を享受できており、特に相談や問題はなかった。
（2）現地調査に関する内容
留学計画では 11 月中旬の時点で、各自派遣前の調査スケジュールを実施し、ある程度の結果が出ているはずであったが、実際は殆どの学生は中国語学習に忙しく、手が付いていない状態であった。今回の出張では、インターンシップ開始前までの行動計画を具体的に確認し、アンケート調査を予定している学生については、アンケート設計、設問等の具体的指導を行った。
（3）帰国後の学習計画に関する内容
今年は「3 年次の夏の使い方」をテーマに AUCP 修了後の計画に関する指導を行った。AUEP、国内外インターンシップ等、その選択肢を提示し、学生の進路希望に合わせ、先輩たちの経験を紹介しつつ相応しいアドバイスを行った。
以上の 3 つに関する面談を行った結果、課題として浮上したのは AUCP 修了後の計画のないまま AUCP での貴重な経験を自覚できていない学生が多々見られた点であった。派遣前に留学期間中の活動に関する研修に加え、3、4 年次の所属学部の科目を含む「夢カレ」生として過ごす 4 年間の後半の 2 年に関する指導を施し派遣すれば、現地体験がより意味のあるものになるように思われた。今後の課題としたい。

インターンシップ受入企業との協議

●**訪問先国**……中国・大連
●**出張期間**……平成 26 年 11 月 30 日～12 月 6 日
●**出 張 者**……アジア研究所教授　西澤正樹、
国際交流課参事補　寺尾浩一
●**主な目的**……大連留学中のアジア夢カレッジ 2 年生（10 期生）14 名のインターンシップ企業先訪問及び、大連外国語大学との打合せを実施する為

●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
12 月 1 日（月）	全日本空輸株式会社 瀋陽・大連支店、駐大連北九州市経済事務所、日本瑞穂実業銀行股份有限公司 大連分行、日本貿易振興機構大連事務所、大連漫歩広告有限公司、北京大成（大連）律師事務所	インターンシップ学生受け入れに関する詳細（残業、出張、疾病時等）に関する事務的な確認 インターンシップ受け入れに関する企業側の希望等の確認 インターンシップ終了時に関する事務事項確認
12 月 2 日（火）	大連愛光浸漬成型有限公司 東芝大連有限公司、大連市経済技術開発区招商中心招商一局一部、大連三島食品有限公司、富士電機大連有限公司、	インターンシップ学生受け入れに関する詳細（残業、出張、疾病時等）に関する事務的な確認 インターンシップ受け入れに関する企業側の希望等の確認

	嘉時泰国際物流（大連）有限公司、米克罗弹簧（大连）有限公司	インターンシップ終了時に関する事務事項確認
12 月 3 日（水）	在瀋陽日本国総領事館在大連出張駐在官事務所 大連中国国際旅行社有限公司 德勤華永会計師事務所有限公司 大連分所 大連泰和信息技術有限公司	インターンシップ学生受け入れに関する詳細（残業、出張、疾病時等）に関する事務的な確認 インターンシップ受け入れに関する企業側の希望等の確認 インターンシップ終了時に関する事務事項確認
12 月 4 日（木）	大連外国語大学漢学院との打合せ	インターンシップ開始時に関する詳細（会社寮への引越し、残業、出張等）事項の打合せ
12 月 5 日（金）	大連晴康国際貿易有限公司	インターンシップ学生受け入れに関する詳細（残業、出張、疾病時等）に関する事務的な確認 インターンシップ受け入れに関する企業側の希望等の確認 インターンシップ終了時に関する事務事項確認

●総括

①インターンシップ受け入れ企業からは、就業後の帰宅に関する不安事項が多かった。また、業務内容に関しては、今までの蓄積があるため、特に要望等はなかった。

②上記①に関しては大連外大とも早急に協議し、予算の問題も含め対応案を考える必要あり。

修了式、企業訪問等

●訪問先国……中国・大連
●出張期間……平成 27 年 1 月 8 日～1 月 21 日
●出 張 者……アジア研究所教授　西澤正樹、
国際関係学部特任教授　九門　崇、
国際交流センター部長　宇田川　裕
国際交流課長　西川修治
国際交流課参事補　寺尾浩一
●主な目的……アジア夢カレッジ 10 期生修了式の開催、インターンシップ受入企業訪問、
大連外国語大学との来年度の打ち合わせ、キャリア開発研修開催の為

●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
1 月 9 日（金）	在瀋陽日本国総領事館在大連領事事務所 大連博科人材有限公司 日本興亜損害保険株式会社大連代表処	インターンシップ学生と受け入れ企業担当者からの学生評価受領及び詳細ヒアリング 来年度オムニバス講義「中国の仕事と生活」講師依頼とインターンシップ受け入れ可能性に関するヒアリング ※インターンシップ最終日
1 月 10 日（土）	在大連開発区企業から学生引越し 夢カレ 10 期生ミーティング 修了式の実施	学生の引越し同行 帰国後の履修、ゼミ指導、就職活動準備に関するガイダンス 修了式の打合せと実施
1 月 11 日（日）	夢カレ 10 期生キャリア研修 3 回目	中国人学生と合同のキャリア研修最終回で、将来の方向性を意識させ、具体的な業種等を考えさせる
1 月 12 日（月）	大連慧搜网絡技術有限公司 日本法円坂律師事務所 大連代表処	インターンシップ学生と受け入れ企業担当者からの学生評価受領及び詳細ヒアリング 来年度オムニバス講義「中国の仕事と生活」講

	大連漫歩広告有限公司 大連泰和信息技術有限公司 株式会社シャトー勝沼	師依頼とインターンシップ受け入れ可能性に関するヒアリング
1 月 13 日（火）	大連三島食品有限公司 大連市経済技術開発区招商中心招商一局一部 富士電機大連有限公司 大連愛光工業部品製造有限公司 YKK　大連吉田拉鏈有限公司	インターンシップ学生と受け入れ企業担当者からの学生評価受領及び詳細ヒアリング 来年度オムニバス講義「中国の仕事と生活」講師依頼とインターンシップ受け入れ可能性に関するヒアリング
1 月 14 日（水）	ミクロ発條（大連）有限公司 遼寧傑仕孚（ジャスフ）律師事務所 大連泰和信息技術有限公司 大連中国国際旅行社有限公司 ホームクリニック大連	同上
1 月 15 日（木）	駐大連北九州市経済事務所 今村美容美髪 大連晴康国際貿易有限公司	同上
1 月 16 日（金）	全日本空輸株式会社 瀋陽・大連支店 日本瑞穂実業銀行股份有限公司大連分行 日本瑞穂実業銀行股份有限公司大連分行	同上
1 月 17 日（土）	大連外国語大学国際交流所長との打合せ	来年度の学生派遣に関するスケジュール及び両大学の今後の打合せスケジュール等、及びそれぞれの課題解決手段等を確認する
1 月 18 日（日）	平和クリニック	インターンシップ学生と受け入れ企業担当者からの学生評価受領及び詳細ヒアリング 来年度オムニバス講義「中国の仕事と生活」講師依頼とインターンシップ受け入れ可能性に関するヒアリング
1 月 19 日（月）	康心美ドラッグストア	同上
1 月 20 日（火）	大連外国語大学漢学院スタッフと打ち合わせ	国際交流処長との打合せに基づき、今年度の改善点を確認し、来年度のプログラムへの反映方法を確認する

●総括

①インターンシップ受け入れ企業からの学生評価は、上下両極端に分かれた。学業成績の良し悪しよりも、非認知能力（主体性、チームワーク力、コミュニケーション能力、課題発見力等）の高い学生がインターンシップにおいて、評価が高かった。さらなる調査が必要である。

②中国人学生と日本人学生のキャリア意識における差は、第一回目と比べると、中国人学生の職業選択に関する意識が変化していると実感することができた。本研修の有効性が確認された。

AUEP　交換・派遣留学制度

韓国（5月）

●訪問先国……韓国
●出張期間……平成 26 年 5 月 24 日～5 月 27 日
●出 張 者……国際関係学部教授　金柄徹
国際交流課主事補　矢吹知大
●主な目的……新規交換・派遣留学協定校開拓のため

●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
5 月 25 日（日）	東西大学校周辺	生活環境調査
5 月 26 日（月）	東西大学校　国際交流センター長、国際交流センター職員	授業視察、学生寮等学内設備視察

●総括

①視察時までに交換留学実施の条件、学生交換に関する覚書の整備等の事前調整を実施し、視察当日はそれまでに合意を得た項目の確認が主であった。交換留学生が相互学習の一環として履修する場合が多い日本語学科の日本語表現の授業、及び韓国語教育課程を開設している外国語教育院の韓国語授業を視察した。また、日本人留学生が平日の各 1 時間ずつ常駐し、韓国人学生との相互学習を促進している Japan cafe の運営状況や、日本研究センターの研究施設や相互学習の状況も視察することができ、相互学習に適した環境が整えられていることを確認した。

②生活環境面では、学生食堂等の学内施設、学生寮の視察を行った。学生食堂では安価に食事をすることができることを確認した。学生寮はキャンパス内に位置し、2 人 1 室である。個室内の設備やキッチン、洗濯機、インターネット接続環境を確認し、安全に生活できることを確認した。学生寮付近には食堂やコンビニエンスストアがあり、最寄りの地下鉄駅付近にはスーパーマーケットがあるなど、生活に必要な物品を容易に調達できることも確認した。

③以上の状況から、本学及び東西大学校で交換留学を開始する決定を行い、学生交換に関する覚書を取り交わし、平成 27 年度から交換留学を開始することとなった。

NAFSA年次大会出展

サンディエゴ(5月)

●訪問先国……アメリカ
●出張期間……平成 26 年 5 月 25 日～6 月 1 日
●出 張 者……国際関係学部講師　太田瑞希子
国際交流課長　西川修治
国際交流課参事補　寺尾浩一
国際交流課主事補　ノボタニ･ケイシー
●主な目的……世界最大の国際教育交流フェアである NAFSA 年次大会で本学紹介ブースを出展し、本学の教育内容を広く周知するとともに、現協定校の関係強化と新たな協定校の開拓につなげるため

●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
5 月 25 日（日）	午後：Institute of Global Exchange Kay Communications, Inc	LA でのインターンシップ生受入企業との協議 インターンシップ前に学生が準備すべきこと、心構え等についての意見交換
5 月 26 日（月）	終日：NAFSA 参加登録、ブース設置作業 午後：Study in Japan ブース現地オリエンテーション	JAFSA、JASSO 事務局、他大学との打ち合わせ
5 月 27 日（火）	終日：Expo Hall にてブース展示及び他ブース訪問 午前:香港大学連合レセプション参加 午後：JAFSA レセプション 場所：Omni Hotel US Partnership Poster Session Study Abroad Foundation（SAF）主催レセプション　場所：Horton Grand Hotel Regency	亜細亜大学の紹介及びネットワーキング 香港並びに世界各国からの大学関係者とのネットワーキング 協定大学（含 WWU、 EWU、 CWU、ASU）及びその他関係大学/機関とのネットワーキング 米国大学との学生交換に関する交渉 SAF 関係大学関係者とのネットワーキング
5 月 28 日（水）	終日：Expo Hall にてブース展示及び他ブース訪問 午前：WWU との会合 Univ. of Michigan Flint との会合 午後： JAFSA Special session on G30　& Internationalization JAPAN SIG Meeting 場所：Hilton Bayside 別日程・終日（太田・寺尾）： Lighthouse（株） Amnet LA REINS INTERNATIONAL㈱ WowmaxMedia	亜細亜大学の紹介及びネットワーキング 今後のプログラム展開についての協議 新規協定及び学生交換の可能性に関する協議 文科省及び G30 採択大学によるプレゼンテーション JAPAN SIG Meeting メンバー大学とのネットワーキング LA でのインターンシップ生受入企業との協議 インターンシップ中の学生に対する企業人からのフィードバックシステムの構築について意見交換 インターンシップ前に学生が準備すべきこと、心構え等についての意見交換
5 月 29 日（木）	終日：Expo Hall にてブース展示及び他ブース訪問	亜細亜大学の紹介及びネットワーキング

	午前 : 亜州大学（台湾）との会合 午後 : SAF との会合　OvECS コーディネーターとの会合	夏に実施を予定している短期研修プログラムに関する打ち合わせ SAF メンバー大学との新たな学生交流に関する協議 学生の生活状況、ホームステイ運営の改善点などについて協議
5 月 30 日（金）	午前 : Expo Hall にてブース展示 ASU との会合、ブース撤収 午後 : サンディエゴ州立大学キャンパス訪問 ALI 関係者と会合 Director, Intensive English for Communication Senior Director Student Mentor & Advisor	亜細亜大学の紹介及びネットワーキング 今後のプログラム展開についての協議 授業内容/制度、ALI ディレクター及びスタッフとの協議、キャンパス内環境調査

●総括

NAFSA での初出展となった今回、JAFSA が取りまとめる Study in Japan に参画したことで、多くの大学とコンタクトを取り、教育連携について協議することができた。
これにより、海外大学のニーズをより的確に把握することができ、今後の本学グローバル展開を具体的に検討する為の課題も採取することができた。
＜今後のプログラム展開について協議した協定校＞
セントラル・ワシントン大学（米国）、ウェスタンワシントン大学（米国）、イースタンワシントン大学（米国）、アリゾナ州立大学（米国）、モンタナ州大学（米国）、亜州大学（台湾）、静宜大学（台湾）、マラヤ大学（マレーシア）、タスマニア大学、リムレック大学（アイルランド）、香港中文大学など
＜新たに協定締結及び学生交流の可能性につき協議した大学＞
オルリアン大学(フランス)、サウスシアトル CC、カリフォルニア州立大学 LA 校, オレゴン州立大学、ディーキン大学、オリンピックカレッジ、ショアライン CC、ミシガン大学フリント校など
CC＝Community College
※その他、展示ブースで約 20 大学に対して本学のプログラムを紹介した。
＜成果＞
協定校とは現在進行中のプログラムの改善点や今後の新たな学生交換の展開について協議することができた。具体的には先方から本学へ長期派遣が困難な場合には、短期プログラムで複数の学生を本学が受け入れることで交流を促進することが確認された。
マレーシアのマラヤ大学とは以前交換留学制度が存在していたことから、夏に現地を訪問し、プログラム再開に向けて具体的に協議を進めることで一致した。
サンディエゴ州立大学では、ALI におけるクラス分けについて意見交換を行うほか、新たに BGP: Business English for Global Practices コースへの本学学生の参加について協議した。
新たな交換留学先の開拓は予想したほど容易ではなかった。既に多くの大学と協定を締結し、交換留学を実施しており、双方向交流を拡大する予定がないため。しかし、上述したように短期プログラムのニーズはあり、「相手校からは短期で複数名受入れ、本学からは長期で少人数派遣する」というスキームならば合意可能であることが確認できた。
長期の交換留学を実施していないフランスの大学と具体的な交流の可能性を生み出すことができ、今後メール等にて協議を継続する。また、私費留学（単位認定型）希望学生を対象に、コミュニティーカレッジへの派遣も有効であることが確認された。日本人学生が比較的少ないうえ、授業料が安価であること、さらにきめ細やかな学生サービスが期待できる。今後、協定締結候補校を絞り、改めてアプローチを行う。
＜課題＞
事前にできるだけ交渉対象とする大学を絞り込み、アポイントをとっておくことが重要。
大学紹介の冊子は、小さくて軽いものを作成し、配布すること。
短期プログラムで留学生を受け入れるニーズははっきりしたが、問題となるのが受入れ時の宿舎である。学生寮の運用を変更し、夏季休暇中に受入れ可能な部屋を確保するなど、早急に対策を講じる必要がある。これにより、交換留学拡充の可能性が広がる。

APPAIE

中国（3月）

●訪問先国……中国・北京
●出張期間……平成 27 年 3 月 22 日～3 月 27 日
●出 張 者……国際交流課書記　富田祐香
●主な目的……国際関連業務に関するスタッフディベロップメントの一環として、JAFSA 海外教育フェア等参加奨励金を受け、3 月 23 日（月）から 26 日（木）に北京で開催された APAIE2015 年次大会に参加した。参加に当たっては、①新たな協定校候補先大学を開拓すること、②協定校の面会し現行の留学プログラムについての打ち合わせの他、新たなプログラム設置の可能性など関係拡大に向けての協議すること、③国際交流教育について世界の大学の情報を集め、自らの海外留学派遣業務に活かすことを主な目的とした。

●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
3 月 23 日（月）	10：00～　北京師範大学訪問　留学生事務室関係者との打ち合わせ 16：00～　JAFSA 海外教育フェア参加奨励金対象者へのオリエンテーション Study in Japan ブース　現地オリエンテーション	毎年夏季に実施しているグローバルプログラム（AUGP）について、研修スケジュール、授業内容等、要調整事項についての打ち合わせ JAFSA スタッフ、海外教育フェア参加奨励金対象者の顔合わせ、APAIE 大会概要、スケジュール等の確認
3 月 24 日（火）	9：00～　展示ブース訪問 11：00～　Opening Ceremony 参加 14：00～　セッションへの参加 展示ブース訪問	協定大学・その他関係大学/機関とのネットワーキング アジア地域における中・短期研修プログラムについての情報収集
3 月 25 日（水）	9：00～　セッションへの参加 14：00～　展示ブース訪問	協定大学・その他関係大学/機関とのネットワーキング アジア地域及びオーストラリアにおける中・短期研修プログラムについての情報収集
3 月 26 日（木）	9:00～　セッションへの参加 14：00～　Global Dialogue, Closing Ceremony への参加	協定大学・その他関係大学/機関とのネットワーキング

●総括

【ブースへの訪問/協定校との面会】

事前に興味のある参加大学については下調べをし、その中でも確実に面会したい大学と協定校はアポイントをとっておき、オーストラリア、香港、シンガポールや東南アジアの大学のブースを中心に回り情報収集をした。事前に面会のアポイントは大学を絞ってとっておいたことで、セッションに参加しながら効率よくブースを回ることができた。APAIE 参加前は、アジアやオセアニアの大学の参加が多いというイメージがあったが、実際参加してみて、予想以上に北米やヨーロッパからの参加も多かったのが印象的であった。また、普段はメールでの連絡が中心だった協定校の担当者とも面会することができ、短期や交換留学派

遣前の課題について詳細に担当者と打ち合わせができたことは有意義であった。
新規協定が締結できそうな大学については、翌年度に現地視察を検討している。
◎訪問した大学ブース一覧
Taylor’s University / Monash University Malaysia/ The Chinese University of Hong Kong
Chitkara University/ University of Macau/Curtin University/Swinburne University of Tecnology/
The University of Sydney/ The University of Western Australia
【セッションへの参加について】
大会中は、下記のセッションに参加したが、その中でも興味深かったのは、アジアでの英語を使った短期研修についてのセッションや短期研修での事前・事後研修の事例を紹介したセッションであった。本学でも、昨年より留学生向けのサマープログラムを開設したばかりであるため、アジア地域の大学でどのような短期研修が行われているのか、どのようなニーズがあるのか大変参考になった。事前・事後の研修もうまく活用することでより研修の効果を高めている短期フィールドスタディーの事例や留学経験者を活用した事前研修会等、実際にプログラムの運営に携わり直接学生に接している教員や国際交流担当者の事例報告から学ぶ点は多く、今後事前・事後の研修を行う上でも取り入れていきたいと思えるような点があった。
◎参加したセッション一覧
・Na ‘Ala Ike Hawai’i：A case of a Cultural Engagement Program
・Key Features for a Successful Course in China
・Overseas Program Based Learning Fieldwork
・English-medium Instruction（EMI） and Its Effect on Student Learning in Japanese Higher Education
・The Development of Programs Taught in English in non-English-speaking Regions: Challenges, Experience and Best Practices
・Double Degrees with Asia: Challenges and Rewards
・English -Taught Summer Programs in Asia Pacific Universities
・Towards Multilateral Collaboration of the Universities: A BRICS Case
・Pre-Departure Learning-Setting Students up for Success Abroad
【まとめ】
この 3 日間で、展示ブースだけでなくセッションやネットワーキングランチの時間も含めて、様々な大学の担当者と知り合う機会に恵まれ、候補先となる大学も見つけることができ、次につなげることができたと思う。日本では学内の業務に追われて留学フェアに参加することが少なかったため、世界の国際交流教育の現状を学ぶ良い機会となった。

【今後の方向性・課題】
・各ブースへの訪問や協定校との面会を通じて、本学の国際交流業務は、派遣業務、受け入れ業務の完全分業制のため、派遣担当と留学生の受け入れ担当の両方で参加すれば、双方により効果があると感じた。
・時間の関係でフランスやドイツのブースまで足を運ぶことができなかったが、今回の参加者リストからも北米やヨーロッパからアジア・太平洋地域の大学との交流を目的とした大学が集まっており、本学でも NAFSA への出展だけでなく、APAIE の出展も検討する必要がある。
・今回面会した大学の中で候補先となる大学については、現地キャンパスを訪問し、協定締結または新プログラムの立ち上げについて協議を続けていく。

新規協定大学・インターンシッププログラム開拓

インド(3月)

●訪問先国……インド(バンガロール・チェンナイ)
●出張期間……平成 27 年 3 月 9 日～3 月 16 日
●出 張 者……国際関係学部特任教授　九門　崇
国際交流課参事補　寺尾　浩一
●主な目的……インドにおける新規インターンシッププログラム開発及び新規協定校開発の為

●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
3 月 11 日（水）	マドラス大学訪問 在チェンナイ企業等訪問	国際関係学部長と面会 本学の紹介及びマドラス大学の国際交流に関するブリーフィング 協定締結に向けた今後の準備事項の確認 在チェンナイ JETRO での現地事情ブリーフィング
3 月 12 日（木）	チェンナイ→バンガロール 在バンガロール企業等訪問	移動 在バンガロール JETRO での現地事情ブリーフィング
3 月 13 日（金）	バンガロール大学訪問 在バンガロール企業訪問（UNOIIN/Chancery Hotel）	バンガロール大学副学長面会 本学の紹介及びバンガロール大学の説明 協定締結に向けた今後の準備事項の確認 インターンシップ受け入れ実績とその内容の説明を受ける
3 月 14 日（土）	バンガロール→デリー到着 在デリー企業訪問（凸版印刷）	移動 インターシップ受け入れ可能性について調査
3 月 15 日（日）	在デリー企業訪問（キャノン）	インターシップ受け入れ可能性について調査

●総括

①マドラス大学、バンガロール大学とも協定締結には前向きのようだが、日本企業等からの話では、簡単ではないとのことであった。インド独特のビジネスの進め方があり、相当時間がかかるかもしれないと感じた。
②インターンシップに関しては、欧州からの学生をインターンシップで受け入れている環境があり、受け入れ自体には柔軟だが、日本人学生の英語力等がどの程度必要なのかさらに調査しなければならない。
③デリーは交通渋滞がひどく、学生のインターンシップは難しいと感じた。移動、住環境は日本人学生向けではない。

英語研修及びＡＵＧＰ（フィリピン）/ＡＵＥＰ（交換留学）

フィリピン(3月)

●訪問先国……フィリピン
●出張期間……平成 27 年 3 月 8 日～3 月 12 日
●出 張 者……国際関係学部講師　小張順弘
国際交流センター部長　宇田川裕
国際交流課長　西川修治
●主な目的……現地語学学校（SELC マニラ）を訪問し、研修内容及び生活環境を調査するとともに、今後 AUGP 及び AUEP の実施可能性を探るため

●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
3 月 8 日（日）	マカティ地区	生活環境調査（治安、交通状況等）
3 月 9 日（月）	午前：SELC マニラ訪問（オルティガス地区） （株）ニチイ学館 専務取締役国際事業統括本部アメリカ・オセアニア事業推進課係長、SELC Sydney, CEO, Marketing Manager-Japan ,Corporate Adviser, ヨーク国際留学センター 営業マネージャー 午後：ホテル訪問（オルティガス地区）、Univ. of Asia and the Pacific 訪問、Arts & Science Department マカティ地区	開講式、施設見学、模擬レッスン受講、今後の連携について協議 学生を派遣した場合の宿舎候補になるか検討 留学関連情報収集 生活環境調査（治安、交通状況等）
3 月 10 日（火）	午前：マラテ地区 午後：De La Salle 大学周辺を調査 Hotel Benike Maison De La Salle	生活環境調査（治安、交通状況等） 周辺にある De La Salle 大学直営の宿舎を見学
3 月 11 日（水）	午前：ケソン市　Univ. of the Philippines 訪問、International Center 、Ateneo De Manila University 訪問 Acting Director, Ateneo Language Learning Center 午後：Miriam College 訪問 Vice President for Academic Affairs Program Officer, Language Learning Center De La Salle University 訪問 Assistant Professor, Department of English and Applied Linguistics, College of Education,	留学関連情報収集 プログラム制度、授業、施設見学、今後の連携について協議 プログラム制度、授業、施設見学、今後の連携について協議 プログラム制度、授業、施設見学、今後の連携について協議

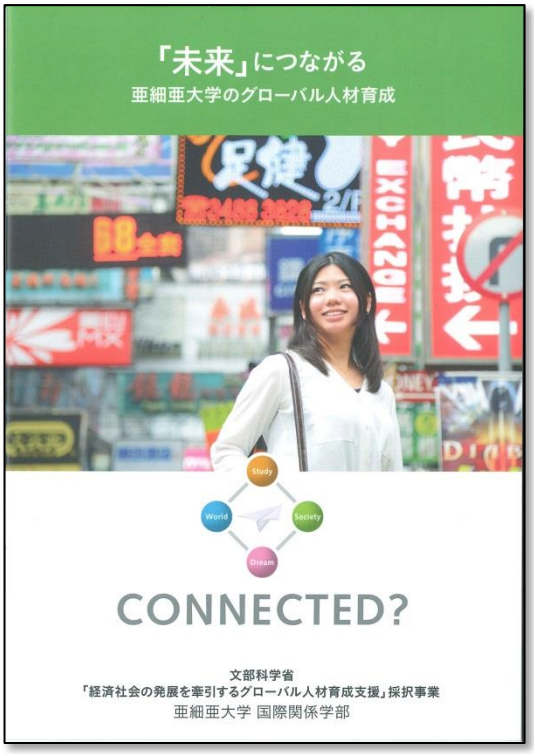
●総括

現在、グローバル人材事業の一環として、TOEIC®のスコアアップを含め、学生の英語力の向上を図っている。従来の国内（＝学内）での正規授業、TOEIC®対策講座、チューターなどの取組みに加え、特に学生の発信力をより強化するために、今回マニラに開講する SELC English

Language Center を活用すべく、現地調査を行った。
また、新たな協定校の開拓を行うため、マニラ近郊の複数の大学と接触し、AUGP（短期夏季/春季研修）または AUEP（交換留学）実施の可能性を探った。
＜SELC マニラについて＞
本センターは、（株）ニチイ学館が運営する英語学校で既にシドニー（オーストラリア）及びバンクーバー（カナダ）に開講した実績を持つ。特にマンツーマンによる、文法・発音・表現などを含め徹底した個人レッスンに特徴があり、本学学生の長期留学前の準備教育として、または海外でのインターンシップへの赴任前教育として成果が期待できる。
同学校は、既に複数の企業と提携しており、学生にとってはレッスン外ではあるが、多くの企業人と接触する機会も生まれ、コミュニケーションを通じて、社会人としての心構え、業界/会社に関する生の情報を入手できるメリットもある。もちろん、TOEIC®スコアアップ研修も可。
徒歩 5 分圏内にコンドミニアムタイプのホテルがあり、比較的安全で、しかもそれほど高額な滞在費も掛からずに生活が可能である。
＜新協定校開拓について＞
今回、以下の 5 大学を訪問した。
Univ. of Asia and the Pacific
アポイントがなかったため、パンフレット入手などの情報収集のみとなった。オルティガス地区にあることで治安及び利便性は高いが、今後さらなる検討が必要。
Univ. of the Philippines
アポイントがなかったため、日本人留学生からのヒアリングのみとなった。主に国立大学が交換留学先として派遣している状況を確認した。
Ateneo De Manila University
大規模でないが、堅実なプログラムの運用をしている。日本の協定校はまだ少なく、本学の学生を派遣する余地は十分ある。ケソン市にあり、キャンパスの向い側に学生が滞在するアパートなどがあり、プログラムを立ち上げる前にはさらなる環境調査が必要。
Miriam College
中高大一環の女子校であるが、短期研修制度では男子学生も受入れが可能である。キャンパスは整然としているが、学生はエネルギーがあり活気に満ちている。授業はアクティブな雰囲気で積極的な発言を求められる。宿舎もキャンパス内にあり、安心して滞在できる環境がある。副学長にも面会し、協定締結に前向きな姿勢がうかがえた。
De La Salle University
市内中心にある大規模な大学で、体系的な授業が行われている。日本の協定校も多く、視察した授業の約半数が日本からの留学生であった。受入れ時期も柔軟である。
一方で都市の中心部にあることで、生活上の安全については、特に初めて留学する学生にとってはハードルが高いように感じる。
＜今後の展開について＞
SELC マニラについては、現時点ではあくまで個人ベースでの参加になるが、特に夏季休暇中に英語でのインターンシップ（マレーシア、シンガポール、香港）を予定している国際関係学部の学生や長期交換留学に選抜された学生を中心にプログラムの紹介をして、今後は他プログラムとの連携を図る。
AUGP（短期研修）及び AUEP（交換留学）の実施可能性については、今後国際交流委員長、実行委員とも協議し、具体的に検討していく。

亜細亜大学〈行動力あるアジアグローバル人材〉育成事業　関連資料

留学リーフレット



グローバル人材育成推進事業
紹介リーフレット